

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第168集

八ツ長Ⅱ 遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

ハツ長Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にとまなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告のハツ長Ⅱ遺跡は、馬淵川左岸の段丘上に立地し、平成2年の発掘調査によって中世の集落跡が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、二戸市教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成3年11月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸市金田一字八ツ長53-2ほかに所在する八ツ長Ⅱ遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道4号金田一バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はIF80-1048、調査略号はYOⅡ-90である。
4. 調査面積は5,250㎡、野外調査期間は平成2年8月10日から10月31日である。
5. 発掘調査は高橋義介・神敏明が担当し、室内整理および報告書の作成は神敏明が担当した。
6. 検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。
 竪穴住居跡 7棟 土坑 8基 溝 3条 掘立柱建設跡 1棟
 柱穴列 1条 柱穴状土坑 347基
7. 分析・鑑定は、次の方々に依頼した。(敬称略)
 石質鑑定 佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
 鉄製品・鉄滓鑑定 赤沼英男(岩手県立博物館)
 灰像分析 バリノ・サーヴェイ株式会社
8. 本報告書では、国土地理院発行の50,000分の1の地形図、建設省東北地方建設局岩手工事事務所作成の500分の1の用地図を使用した。
9. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。
10. 発掘調査および室内整理に際しては、次の機関の御協力と御教示を賜った。
 建設省東北地方建設局岩手工事事務所 二戸市教育委員会
11. 野外調査にあたっては、地元の方々の御協力をいただいた。
12. 調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序 例言

本 文

I. 調査に至る経過	3	2. 土坑	34
II. 遺跡の立地と環境	4	3. 掘立柱建物跡	39
1. 遺跡の位置	4	4. 柱穴列	39
2. 地形	4	5. 溝跡	41
3. 周辺の遺跡	6	6. 柱穴状土坑群	43
4. 基本土層	10	7. 遺構外出土遺物	50
III. 調査方法と整理方法	11	V. まとめと考察	54
1. 野外調査	11	付編1 八ツ長Ⅱ遺跡植物珪酸体分析 報告	59
2. 室内整理	11	付編2 八ツ長Ⅱ遺跡鉄器・鉄滓の金属 学的解析について	62
IV. 検出された遺構と遺物	15		
1. 竪穴住居跡	15		

図 版

第1図 岩手県全図	1	第11図 3号住居跡(遺構・遺物)	22
第2図 遺跡位置図	2	第12図 4号住居跡	24
第3図 地形分類図	5	第13図 5号住居跡	26
第4図 周辺の遺跡	8	第14図 4号・5号住居跡(遺物)	27
第5図 基本土層図	10	第15図 5号住居跡(遺物)	28
第6図 遺構配置図	13	第16図 6号住居跡	30
第7図 1号住居跡	16	第17図 6号・7号住居跡(遺物)	31
第8図 1号住居跡(遺物1)	17	第18図 7号住居跡	33
第9図 1号住居跡(遺物2)	18	第19図 1号土坑	34
第10図 2号住居跡(遺構・遺物)	20	第20図 2号土坑	34

第21図	3号土坑	35	第29図	1号・2号・3号溝跡	42
第22図	4号土坑	35	第30図	柱穴状土坑群(1)	44
第23図	3号・4号土坑(遺物)	36	第31図	柱穴状土坑群(2)	45
第24図	5号土坑	37	第32図	柱穴状土坑群(遺物)	49
第25図	6号土坑	37	第33図	遺構外出土遺物(1)	51
第26図	7号土坑	38	第34図	遺構外出土遺物(2)	52
第27図	8号土坑	38	第35図	遺物外出土遺物(3)	53
第28図	掘立柱建物跡・柱穴列	40			

写 真 図 版

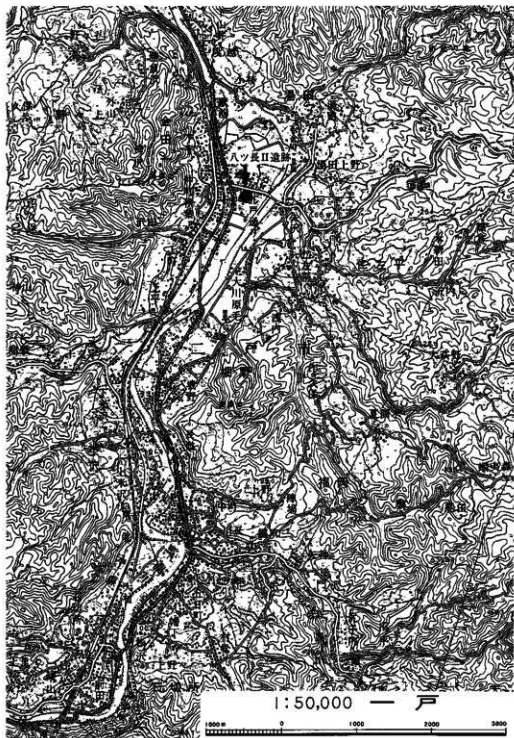
図版 1	遺物全景	74	図版10	土坑(1)	83
図版 2	調査前近景・南壁土層断面	75	図版11	土坑(2)	84
図版 3	1号住居跡	76	図版12	土坑(3)	85
図版 4	2号住居跡	77	図版13	溝跡	86
図版 5	3号住居跡	78	図版14	遺物(1)	87
図版 6	4号住居跡	79	図版15	遺物(2)	87
図版 7	5号住居跡	80	図版16	遺物(3)	89
図版 8	6号住居跡	81	図版17	遺構外出土遺物	90
図版 9	7号住居跡	82			

表

表 1	周辺の遺跡一覧表	9	表 5	二戸市内の中世堅穴遺構	56
表 2	柱穴状土坑計測表(1)	46	表 6	鉄製品一覧表	58
表 3	柱穴状土坑計測表(2)	47	表 7	石器一覧表	58
表 4	柱穴状土坑計測表(3)	48			



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

二戸市金田一字上田面から同市金田一字段ノ越に至る総延長3.2kmの一般国道4号金田一バイパスの建設は、昭和50年に計画着手され、平成5年に完成の予定である。

この間に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、昭和53年から建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で事前協議が行われた。岩手県教育委員会は建設予定地内の遺跡分布調査を実施し、上田面Ⅲ、上田面Ⅱ、荒田Ⅲ、荒田Ⅳ、八ツ長Ⅱ、沖Ⅰ、馬場Ⅱ、馬場、駒焼場、府金橋の10遺跡を確認し、工事計画に沿って発掘調査を実施することにした。すでに府金橋遺跡は昭和56・57年に、駒焼場遺跡は昭和61・62年に、馬場遺跡は昭和62・63年に、沖Ⅰ・馬場Ⅱ遺跡については昭和63・平成元年にそれぞれ発掘調査を実施し、調査報告書を発行している。

八ツ長Ⅱ遺跡については、昭和57年から岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で現地確認調査を含む協議が行われた。その間の経過は、以下のとおりである。

昭和57年10月25日付け 建東岩二工第126号 岩手工事事務所長から岩手県教育長あて
埋蔵文化財包蔵地の分布調査についての依頼

昭和58年10月19～21日 岩手県教育委員会による現地調査の実施

昭和58年10月23日付け 教文第262号 岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
金田一バイパス建設工事に係る遺跡分布調査の結果について回答

平成元年9月5日付け 教文415号 岩手県教育長から岩手工事事務所長あて
平成2年度における埋蔵文化財に関連する土木事業等の照会

平成元年10月2日付け 建東岩二工第85号 岩手工事事務所長から岩手県教育長あて
金田一バイパス建設工事の遺跡について回答

平成2年1月23日付け 岩手工事事務所、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の協議
これにより、岩手県教育委員会は八ツ長Ⅱ遺跡5,250㎡の調査を平成2年度の岩手県文化振興事業団の受託事業とし、当埋蔵文化財センターが平成2年7月31日付け委託契約により調査を実施したものである。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

八ツ長Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南南東約1.2kmの距離に位置している。遺跡の所在する二戸市は、県都盛岡市から北方に64km、岩手県の北端部にある。市の中央を馬淵川が北流し、東北本線と国道4号線が南北に縦断している。東側は軽米町・九戸村、西側は浄法寺町・青森県田子町、南側は一戸町、北側は青森県三戸町・名川町と隣接し、総面積は、238.17 km^2 である。

本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「一戸」(NK-54-18-11)、および2万5千分の1地形図「陸奥福岡」(NK-54-18-11-3)の図幅に含まれ、北緯40度18分36秒、東経141度18分49秒付近にある。

2. 地形

二戸市は西に奥羽山脈、東に北上山地があり、その間を馬淵川が北流している。この地域の北上山地には古い隆起準平原が広く分布しており、最高点は折爪岳(標高852m)である。南西の西岳(1,018m)、稲庭岳(1,078m)より速なる奥羽山脈は前面にせまる200~300mの丘陵の背後にあるため、市街地からは見えない。

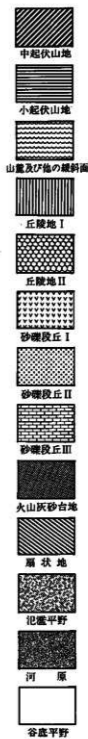
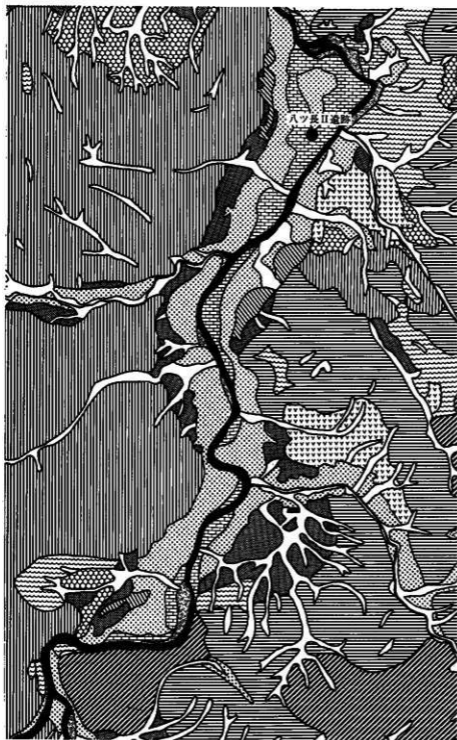
馬淵川は葛巻町袖山に源を発し、葛巻町・一戸町・二戸市、そして青森県三戸町などを経て八戸市で太平洋にそそいでいる。幹線流路延長142km、流路面積2,050 km^2 の大河である。二戸周辺では、南西の安代町方面より流れてくる安比川、東方からの白鳥川、金田一川、西方からの十文字川と合流している。

この地域は馬淵川を中心とした河川によって形成された段丘が狭く発達しており、上位より仁左平、福岡、長嶺、中町、堀野、中曾根の各段丘に区分されている。(松山 1981)

八ツ長Ⅱ遺跡をのせる段丘は、馬淵川左岸に形成された完新世段丘の一つであり、松山氏の堀野段丘に相当する地形面である。堀野段丘は南部浮石層を伴う黒色土層をのせるが、本遺跡は段丘縁辺部に立地しているため遺跡内の層序では南部浮石層を欠いている。

段丘面の傾斜はゆるやかである。低位面との比高差は8mほどあり、やや急な段丘崖をなしている。遺跡の標高は85~87mで、馬淵川の川床面との比高差は10mほどである。

遺跡の現況は宅地、畑地である。遺跡と同じ面の土地は宅地、畑地、水田に利用され、馬淵川と段丘崖の低位の平坦地は小規模な水田がつくられている。



S=1:50000

第3図 地形分類図

3. 周辺の遺跡

全国遺跡地図【岩手県】(1984、文化庁)によると、本遺跡のある二戸市に登録されている縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世の遺跡数は100数ヶ所である。10数年前からバイパス道路建設、高速道路建設などに伴い、記録保存を目的とした緊急発掘調査が多く行われるようになった。本項では、竪穴住居跡が検出されている遺跡を中心に、周辺の遺跡について時代、時期別に概観を述べる。遺構、遺物の時期決定については報告書に従っている。

縄文時代 早期

二戸市南西部の300mの丘陵に位置する大久保遺跡1棟、低位段丘上にある馬立I遺跡16棟、馬淵川西岸の沖積段丘上の市街地にある家ノ上遺跡2棟、長瀬B遺跡5棟が検出されている。貝殻文尖底土器を主体とするものである。

前期

低位段丘に立地している火行塚遺跡から2棟、上里遺跡から2棟の竪穴住居跡が検出されており、いずれも円筒土器が出土している。また、上里遺跡の前期末葉の土壌から人骨7体が発見されている。馬淵川西岸の沖積段丘面にのる中曾根II遺跡から円筒土器が共伴する住居跡、大木系土器が伴う住居跡が8棟検出されている。隣接する一戸町の北館B遺跡、平船III遺跡、軽米馬場野II遺跡からは日計式押型文の土器が出土している。

中期

竪穴住居跡は沖積段丘上にのる沢内B遺跡から2棟(大木10式)、荒谷A遺跡19棟(円筒上層e式-2、大木8b式-14、大木9式、以降-3)、下村B遺跡5棟(大木9式)、上村遺跡5棟(大木10式)が検出されている。大半が大木式土器を伴う中葉以降のものである。円筒土器を伴う住居跡は、低位段丘に立地する上里遺跡から7棟(円筒上層a式-5、d式-1、その他-1)検出されている。

後期

市内で検出されている竪穴住居跡は後期初葉、前葉のものが圧倒的に多く45棟である。その分布も南西部の300m台の丘陵やそれに挟まれた低位段丘上に立地している。主な遺跡は馬立I遺跡-27棟、馬立II遺跡-18棟、青ノ久保遺跡-2棟である。低位段丘にのる遺跡では沢内遺跡から2棟検出されている。前葉のものは十腰内I式である。中葉以降のものは隣町の軽米町馬場野II、君成田IV遺跡から出土している。沖積段丘にのる下村B遺跡からは配石遺構や甕棺墓などが発見されている。馬立II遺跡からは粘土紐を弓矢、動物、釣針などの形に張り付けている狩猟文土器、米沢遺跡からもそれに類した土器が出土している。

晩期

本遺跡から北約5kmにある雨滝遺跡は遺物の出土量も多く、代表的な遺跡である。住居跡が

検出されている遺跡は沢内遺跡2棟、中曾根遺跡1棟のみである。

弥生時代

馬淵川の沖積段丘に立地する大淵遺跡、長瀬B遺跡から各1棟、沢内川の小規模な低位段丘にのる馬立I遺跡から4棟、堅穴住居跡が検出されている。また、前葉の谷起筒式土器の特徴的なものが火行塚遺跡から出土している。

古墳～奈良時代

馬淵川東岸にのる掘野古墳がある。周濠の外径が12mで、石組で囲った主体部をもつ古墳である。副葬品は鉄製の締め金具をもつ全長45cmの蕨手刀である。

二戸市内のこの時期の主な遺跡は、馬淵川西岸の沖積段丘に立地する遺跡—長瀬B遺跡25棟、長瀬C遺跡30棟、中曾根II遺跡76棟、荒谷A遺跡4棟、長瀬D遺跡5棟、上田面遺跡26棟、府金橋遺跡2棟、馬場遺跡11棟、駒焼場7棟など、馬淵川東岸の沖積段丘にのる遺跡—掘野遺跡11棟、300mの丘陵上にある遺跡—青ノ久保遺跡5棟などである。

馬淵川西岸に遺跡が集中しているのは、二戸バイパス・金田バイパスが西岸を通るためと東岸の段丘は狭く、しかも市街化されているためと思われる。

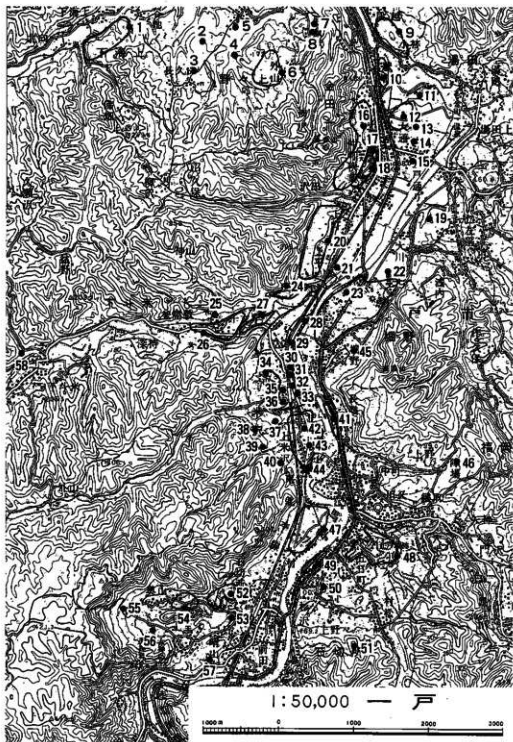
平安時代

13遺跡から90棟の堅穴住居跡が検出されている。馬淵川西岸の沖積段丘上にある遺跡—中曾根遺跡6棟、中曾根II遺跡2棟、上田面遺跡2棟、長瀬A遺跡11棟、長瀬B遺跡7棟、府金橋遺跡7棟、駒焼場遺跡（昭和58年調査）2棟、駒焼場遺跡33棟、馬場遺跡3棟、米沢遺跡2棟、低位段丘上にのる遺跡—上里遺跡1棟、火行塚遺跡9棟、300mの丘陵上にある遺跡—青ノ久保遺跡5棟である。住居跡が十和田a降下火山灰（降下年代9世紀後葉～10世紀前葉）に覆われ、降下以前に廃棄された住居跡が中心である遺跡は中曾根遺跡、中曾根II遺跡、上田面遺跡、長瀬A遺跡、馬場遺跡、米沢遺跡、火行塚遺跡である。県北部ではこの時期にカマドの付設場所が方位と共に壁中央部から隅寄りに変化している。

埋土に十和田a降下火山灰をブロックで混入する方形周溝跡が大淵遺跡1基、上里遺跡5基、長瀬C遺跡1基、長瀬D遺跡1基検出されており、墓塚形態を考える上に良い資料である。

中世

堅穴住居跡が検出されている遺跡は沖積段丘に乗る長瀬C遺跡10棟、長瀬D遺跡1棟、家の上遺跡1棟、下村B遺跡2棟、駒焼場遺跡（昭和58年調査）1棟、馬場遺跡1棟、沢内B遺跡4棟、沖I遺跡4棟である。遺物には銭貨・鉄製品・陶磁器などがある。低位段丘にのる上里遺跡からも1棟検出されている。形態には、出入口の張り出しをもつものもたないものがある。また、床面に炉をもつものも見つかっている。柱穴は壁際に並んでいる。



第4図 周辺の遺跡

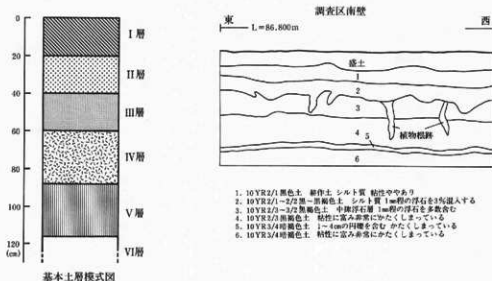
番号	遺構名	種別	遺構・遺物	番号	遺構名	種別	遺構・遺物
1	海上館	城館跡	居館、中世	30	長瀬B	集落跡	縄文早期住、奈良・平安住
2	林向	散布地	土器、縄文晩期	31	長瀬A	集落跡	縄文中～後期住、奈良・平安住
3	上ノ沢I	散布地	縄文土器、石鏃	32	家ノ上	集落跡	縄文早期住、中～後期住、中世住
4	仏畑	散布地	土器、縄文後晩期	33	寛谷B	集落跡	縄文後期住、平安住
5	野々上Ⅲ	散布地	土器、前期、土師器	34	佐々木館	城館跡	居館、土器、縄文、土師器
6	上ノ沢Ⅱ	散布地	土器、前期他	35	沢内B	集落跡	縄文中期住居跡、中世住居跡
7	勝負沢Ⅲ	散布地	縄文土器、土師器	36	沢内	集落跡	縄文後期住、縄文後・晩期土器
8	親久保Ⅱ	散布地	土器、縄文後期	37	上平Ⅰ	散布地	土器、縄文、土師器
9	段ノ越	散布地		38	上平Ⅱ	散布地	縄文土器
10	駒焼場	集落跡	縄文住、奈良・平安住	39	上平Ⅲ	散布地	土器、縄文晩期、土師器
11	大釜	散布地	縄文土器	40	上平Ⅳ	集落跡	土器、縄文、土師器
12	馬場	集落跡	奈良・平安住、中世住	41	長嶺	散布地	縄文土器、矢ノ根
13	馬場Ⅱ	散布地	陥し穴状遺構	42	寛谷	散布地	土器、晩期
14	沖Ⅰ	集落跡	中世住居跡	43	下村B	集落跡	縄文中期住、中～後期土器
15	ハツ長Ⅱ	集落跡	中世住居跡	44	上村	集落跡	縄文中期住、縄文中期土器
16	秋場	散布地		45	堀野館	館跡	
17	四戸城	館跡		46	横山	散布地	土器、縄文晩期、注口、土偶
18	館	散布地	縄文土器、土師器	47	中曾根	集落跡	土師器
19	戸花	散布地	土器、縄文晩期	48	九戸城	城跡	
20	上町	集落跡		49	横場	散布地	土器、縄文晩期、注口、土偶
21	上田面	集落跡	平安住、縄文早期土器、土師器玉	50	八幡下	散布地	縄文晩期土器
22	大川原毛	散布地		51	村松館	館跡	
23	堀野	集落・館跡	土器、縄文	52	火行塚	集落跡	縄文前期住、平安住、弥生土器
24	海徳田	散布地	縄文土器、土師器	53	上里	集落跡	縄文前～中世住、平安住、中世住
25	十文字Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器	54	横長根	散布地	縄文土器、土師器
26	十文字Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器	55	土川Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器
27	細越	散布地	縄文土器	56	土川Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器
28	長瀬D	集落跡	縄文晩期・奈良住居跡	57	大淵	集落跡	弥生住居跡、弥生土器
29	長瀬C	集落跡	奈良・中世住居跡、土師器	58	下斗米館	館跡	

表1 周辺の遺跡一覧表

4. 基本土層

調査区は南北方向に長く、表土の利用状況も異なっている。北側区域は宅地、中央部と南側区域は畑地として利用されている。また、畑地として利用されていた土地のなかでも新作物が異なっている。そのため上層部に多少の違いがあるものの、基本的な層序は次の6層に分けられる。

- I層 黒色土 (10YR2/1) シルト。表土で畑地の耕作土、宅地や道路の盛土層である。調査区全域に認められる。層厚20~30cm。
- II層 黒色~黒褐色土 (10YR2/1~2/2) シルト。十和田b降下火山灰起源の1~3mm程度の灰白色浮石が3%ほど混じる。調査区北側のごく一部の地点では上面に2~3cmの厚さで十和田a降下火山灰がのる。層厚20~30cm。
- III層 黒褐色土 (10YR2/3~3/2) 中振浮石起源の腐植土および中振浮石層。層厚20~30cm。中振浮石 (黄褐色10YR5/6 粒径1~3cm) は、本遺跡では層として形成されず、断続的にブロックで残っているところが多い。
- IV層 黒褐色~暗褐色土 (10YR2/3~3/4) シルト。浮石を含まない。粘性に富み、ひじょうに堅く締まっている。層厚30~40cm。
- V層 褐色土 (10YR4/4) 段丘基盤層上位のシルト層。粘性に富み、非常に堅く締まっている。層厚30~40cm。
- VI層 段丘基盤層中位の砂層。褐色 (7.5YR4/6) 小円礫を少量含む。



第5図 基本土層図

Ⅲ 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

本遺跡の調査区域は、南北約185m、東西約30mの長方形に近いかたちをしている。そこで、北側区域と南側区域に任意の基準点1・2を設置し、2点間を見通す直線と基準点を通りこれに直交する直線を座標の基軸線とした。各基準点の平面直角座標値（第X系）は下記のとおりである。調査区域は基準点2を原点とする3m×3mの区画を設け、西側から東側へアルファベットのA～P、南側から北側へ1～64の数字を付した。区画の名称はこれらの組み合わせによってA1、A2区と呼称した。区画の南北線は真北に対して約18度20分東偏している。

基準点1 X=34,525.204m Y=40,821.786m H=86.382m

基準点2 X=34,637.075m Y=40,858.147m H=85.496m

(2) 掘掘り

調査区西側北端と東側中央部から南端まで幅約1mのトレンチを設定した結果、遺構の一部と思われる黒色土が検出されたため重機による表土除去を行い、その後、人力による掘り下げを行った。

(3) 精査と実測

住居跡は4分法、土坑、柱穴状土坑は2分法を原則として精査を実施した。また、溝跡は土層観察用のベルトを設けて調査を行った。遺構の実測図は、簡易の遣り方測量を設定し、20分の1の縮尺を用いて行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(4) 写真撮影

現場での写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7判（モノクロ）1台を使用した。

2. 室内整理

(1) 遺物の処理

遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、実測、トレース、写真撮影、遺物図版作成の順に整理を行った。

(2) 遺物図版

図版は、遺構から出土したものは遺構別に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。縮尺は礫石器が3分の1、土器・土器拓影・剥片石器・鉄製品・鉄滓・銭貨が2分の1を原則としたが、器種の大小に応じて適宜縮尺を変えて掲載した。

(3) 遺構図面の処理

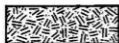
図版は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版作成の順に整理を行った。

(4) 遺構図版

図版の縮尺は住居跡と1号・2号・6号土坑、柱穴状土坑、掘立柱建物跡、柱穴列は60分の1、溝跡は不定である。図版中の調査区域外、攪乱箇所、灰には下図のようなスクリーントーンを使用した。

(5) 写真図版

縮尺は不定である。遺物番号は遺物図版と符号している。



調査区域外



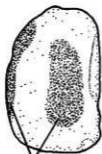
攪乱



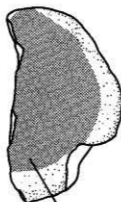
灰の範囲

P₁・P₂・P₃ …柱穴

S …小石・礫

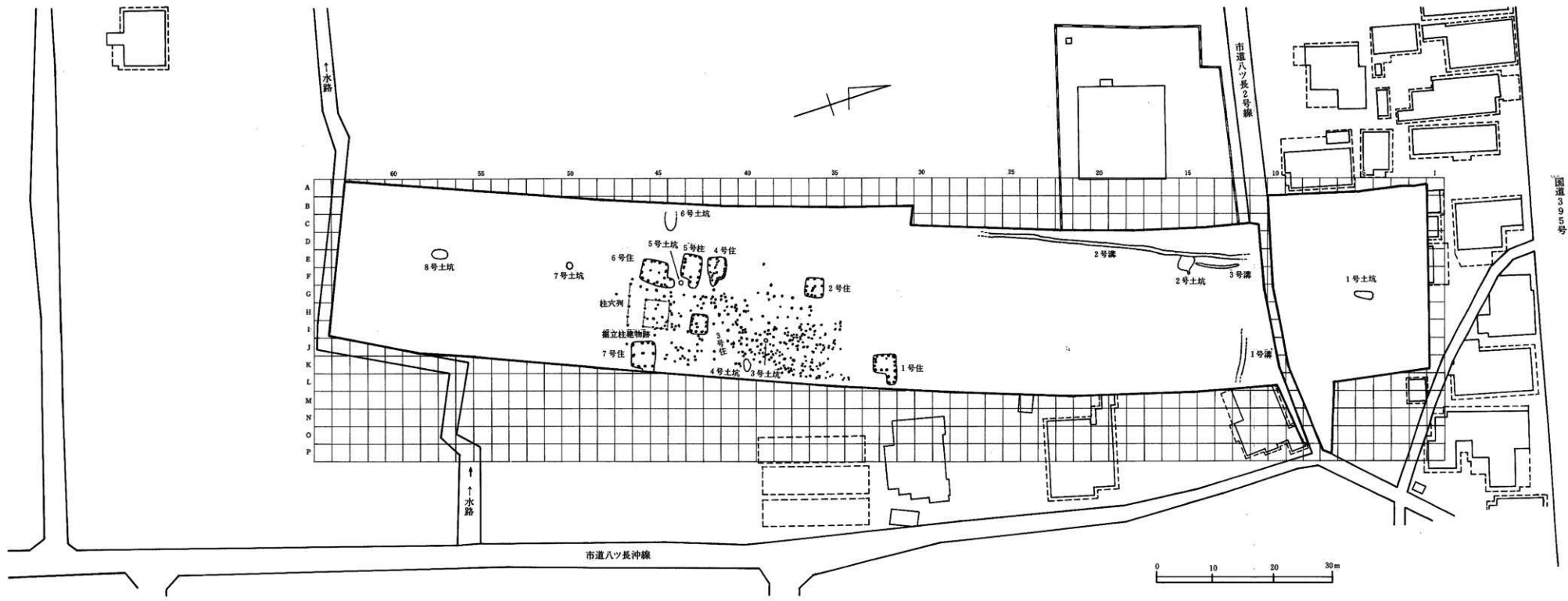


柱穴



炭化物の付着

スクリーントーンの表し方



第6図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

調査の結果、竪穴住居跡7棟、土坑8基、溝3条、掘立柱建物跡1棟、柱穴列1条、柱穴状土坑347基が検出された。出土した遺物は、陶磁器、鉄製品、鉄滓、縄文土器、石器である。

1. 竪穴住居跡

1号住居跡（第7図、写真図版3）

本遺構は、調査区中央の東端に位置している。検出は基本層序Ⅱ層下位からⅢ層（中掘浮石層）上面において、黒色土の方形状の落ち込みによって確認されたものである。

平面形は、南北方向に長い長方形を呈し、東壁北端から東の方向に張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面中央で東西3.2m、南北3.9mを測る。出入口部は上場の計測で長さ1.9m幅1.6mを測り、床面から検出面へは小さな段をもつが、平均角約10度で傾斜しながら上がっている。壁はすべてⅢ層中にあり、崩落箇所もあるが、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は北壁が39～44cm、西壁36～47cm、南壁45～53cm、出入口部を除いた東壁が43～46cmである。

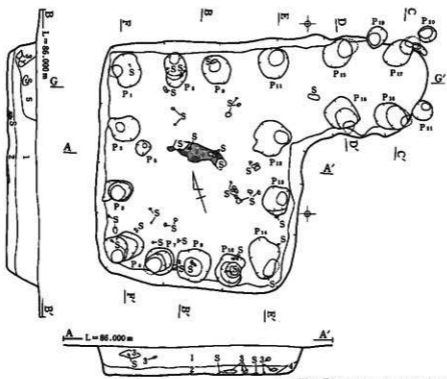
埋土は、黒色・黒褐色・暗褐色のシルト質土で構成され、全体に1～3mm程度の浮石を少量混入し、堅くしまっている。また、中位から下位にかけて褐色の砂質シルトのブロックが散在する。埋土の堆積状況は、褐色土の混入が不自然なことから見て、人為的な埋め戻しが行われてたと考えられる。

床面は基本層序のⅣ層中に形成されており、出入口の一部を除いて暗褐色シルト質土で貼床され、ほぼ平坦で堅くしまっている。床面のほぼ中央部に20cm×50cmの長方形を呈する炭化物の細片と灰の混合土があり、その混合土の東西辺に石が配されている。

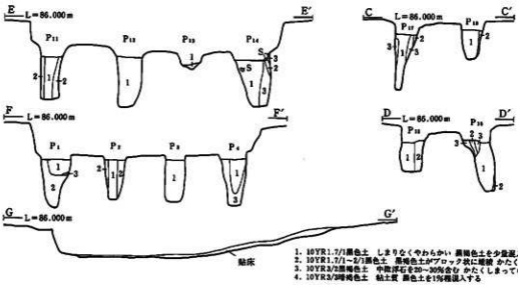
小穴は、遺構の外周と壁際から21個検出され、うちP₁～P₅、P₇～P₁₀が柱穴と考えられる。柱穴は平面形がいずれも方形ないし長方形を基調とする掘り方を有し、その径は30～60cmである。柱痕の形は不詳のものが多いが、確認できたもので14～20cmを測る。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	53×45	48×38	44×32	60×42	54×34	24×23	49×44	50×43	53×52	46×40	49×46
深さcm	85.5	75	71	83.5	79	8	60	74	64	72.5	83

No.	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁
径 cm	58×57	47×40	66×49	35×28	50×47	53×38	55×42	35×28	28×25	33×30
深さcm	93.5	76.5	87.5	95.3	87	98	92	38	38.5	56

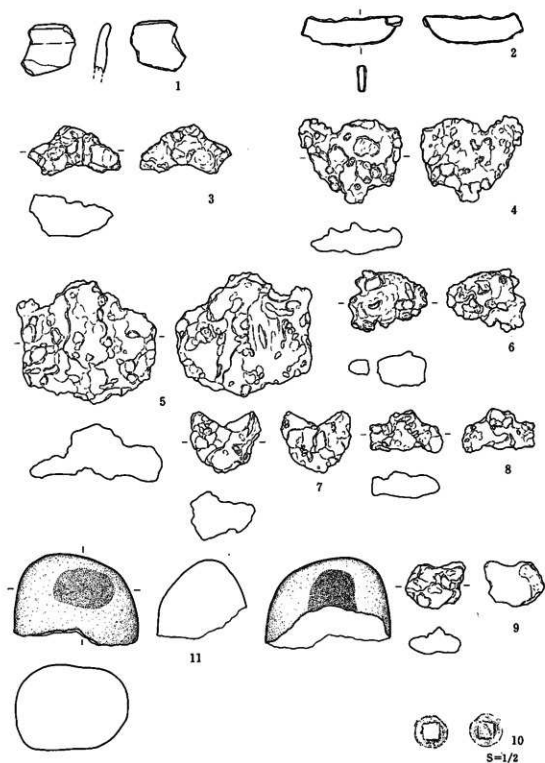


1. 10YR2/1黒色土 シルト質 2-3mmの浮石を3%混入 かなかしまっている
2. 10YR2/2暗褐色土 シルト質 1=程度の浮石を最少混入 かなかしまっている
3. 10YR4/6褐色土 砂粒が混入する 粘性ややあり かなかしまっている
4. 10YR3/3暗褐色土 黒色土と壁層基による中層浮石の混合土
5. 10YR2/3黒色土 粘性あり やわらかい

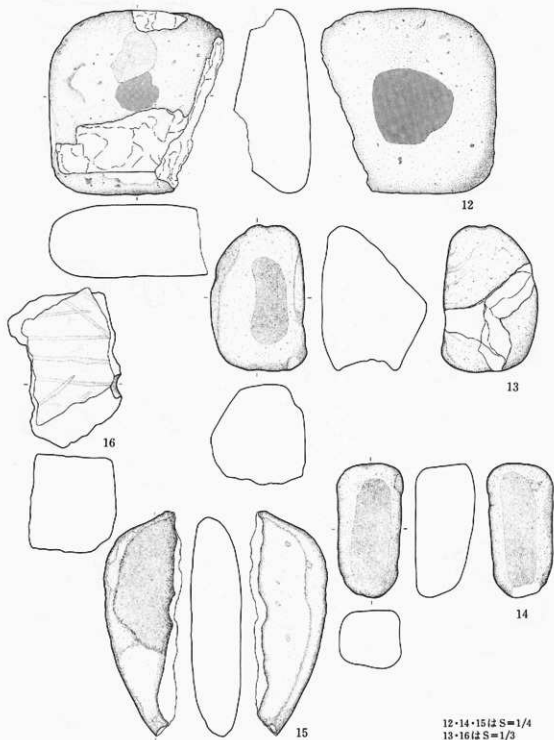


1. 10YR1.7/1黒色土 しまりなくやわらかい 黒褐色土を少量混入する
2. 10YR1.7/1-2/1黒色土 黒褐色土がブロック状に堆積 かなかしまっている
3. 10YR2/2暗褐色土 中層浮石を20-30%含む かなかしまっている
4. 10YR2/3暗褐色土 粘土質 黒色土を1%混入する

第7図 1号住居跡



第8图 1号住居跡(遺物1)



12·14·15(2) S=1/4
 13·16(2) S=1/3

第9図 1号住居跡(遺物2)

出土遺物（第8・9図、写真図版14）

1は美濃灰軸陶器の皿の口縁部で15世紀末のもつと推定される。2は穂柄具と思われる鉄製品で、一部欠損しており残存長は5.3cm、最大厚0.5cmである。3～9は鉄滓である。10は鋳銭で、直径が1.8cm、円周の一部が欠けている。11～15は磨石で、12の一部に煤が付着している。石質は、いずれも輝石安山岩である。16は石臼で8本の溝が刻まれている。石質は安山岩熔岩である。鋳銭だけが床面からの出土で、他は埋土からの出土である。

遺構の形態及び出土遺物から中世後半の住居跡と推定される。

2号住居跡（第10図、写真図版4）

本遺構は、調査区中央に位置している。検出は基本層序Ⅱ層下位からⅢ層上面において、黒色土の方形状の落ち込みによって確認されたものである。

平面形は、東西方向にやや長い長方形を呈し、張り出し（出入口部）はもたない。南壁側は、農耕による攪乱をうけている。規模は、床面中央で東西3.1m、南北2.7mを測る。壁はすべてⅢ層中にあり、崩落や攪乱箇所もあるが急傾斜で立ち上がっている。壁高は北壁が10～13cm、西壁14～19cm、南壁14～21cm、東壁10～15cmである。

埋土は、基本層序のⅡ層に相当する直径2～3mm大の浮石を3%程混入する黒色シルト質土1層で構成され、堅くしまっている。所々にⅣ層に相当すると思われる黒褐色シルト質土の小ブロックが混入するが、埋め戻しによるものか攪乱によるものかは不明である。

床面はⅢ層下面からⅣ層上面にかけて形成されており、ほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴は、壁際および中央部付近にP₁～P₁₂を検出した。このうち130cm前後の間隔で配置されるP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈、P₉は径24cm～36cm、深さは25cm以上あり、主柱穴と考えられる。掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈する。柱痕の径は不詳である。

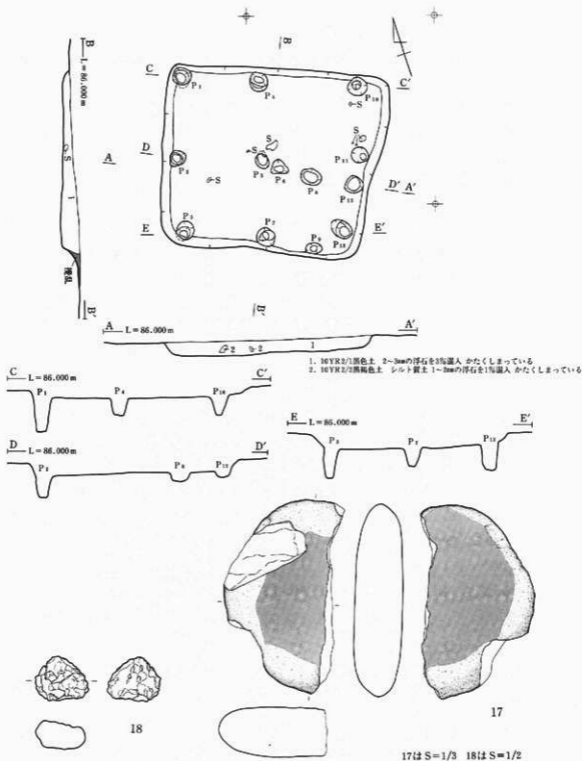
No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	30×26	25×24	29×27	30×28	24×19	28×22	30×28	34×26	25×16	32×30		
深さcm	51	34	48	26.5	25	8.5	30	13.0	13.3	31.8		

No	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	29×26	29×29	36×26
深さcm	53.5	11.8	42

出土遺物（第10図、写真図版14）

17は磨石で、両面に煤が付着している。18はP₁柱穴から出土した鉄滓である。

鉄滓が出土したことにより本遺構も他の住居跡と同様に中世後半のもつと推定される。



第10図 2号住居跡 (遺構・遺物)

3号住居跡（第11図、写真図版5）

本遺構は、調査区中央やや南寄りに位置している。検出は、基本層序Ⅱ層下位からⅢ層上面にかけての黒色土の方形の広がりによって確認されたものである。

平面形は、東西方向にやや長い長方形を呈し、張り出し（出入口部）はもたない。規模は、床面中央で東西3.2m、南北2.7mを測る。壁はすべてⅢ層中にあり、急傾斜で立ち上がっている。壁高は北壁が16～19cm、西壁17～22cm、南壁18～23cm、東壁14～17cmである。

埋土は、黒褐色のシルト層土2層で構成されている。上位から中位にかけては、基本層序のⅡ層に相当する1～3cm程度の浮石を含む黒褐色シルト質土でしまっている。下位は、1～3cm程度の褐色土の小粒が少量混入する黒褐色土で、粘性・しまりともあまりない。

床面は、基本層序のⅢ層中に形成され、やや凹凸がみられるが、堅くしまっている。柱穴・小穴は、壁際および中央部付近からP₁～P₁₀を検出した。このうち壁際のP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈、P₉、P₁₀は径30cm～59cm、深さは49cm以上あり、主柱穴と考えられる。掘り方の平面形は楕円形を基調となす。柱痕の径は確認できなかった。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径 cm	45×30	37×36	50×32	52×40	55×30	52×30	19×15	42×40	47×38	44×31
深さcm	54	53	63	80	49	57	10	49	47	52

No.	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	30×20	62×45	47×35	59×34	45×32
深さcm	53	56	76.5	65	34

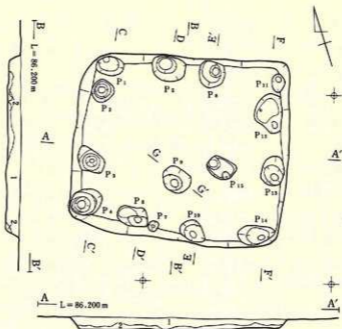
出土遺物（第11図、写真図版15）

19は鉄滓である。20は加工痕のある不定形石器で、縄文時代のもと思われる。長さは4cmである。21・22は角釘で、21は長さ3.2cm、22は先端側が欠損しており残存長は3.2cmである。23は刀子の先端部で、身の部分から欠損している。残存長は3.6cm、幅1.2cmである。いずれも埋土からの出土で床面からの出土遺物はない。

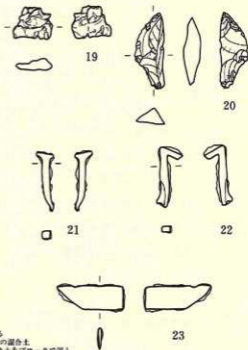
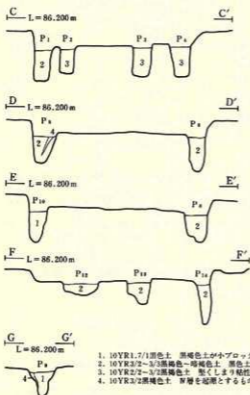
本遺構からも鉄滓と鉄製品が出土していることから、他の住居跡と同様に中世後半の遺構と推定される。

4号住居跡（第12図、写真図版6）

本遺構は、調査区中央のやや西寄りに位置している。本遺構の南側に1m程離れて5号住居跡が隣接する。検出は、基本層序Ⅳ層下位からⅢ層上面にかけての黒色土の方形の落ちこみによって確認されたものである。



1. 10YR2/2黒褐色土 1~3mmの浮石を5%含む しまっている
2. 10YR2/3黒褐色土 褐色土の小アブロックが少量混入



1. 10YR1.7/1原色土 黒褐色土が小アブロックで混入する
2. 10YR3/2~3/3黒褐色~暗褐色土 原色土と暗褐色土の混合土
3. 10YR2/2~3/2黒褐色土 堅くしまり粘性に富む 原色土をアブロックで混入
4. 10YR3/2黒褐色土 N層を起源とするもので粘性に富む

S=1/2

第11図 3号住居跡 (遺構・遺物)

平面形は、東西方向にやや長い長方形を呈し、東壁中央部から東の方向に張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面中央で東西3.4m、南北2.9mを測る。出入口部は上場の計測で長さ1.3m、幅1.2mを測り、床面から検出面へは平均角約15度で傾斜しながら、ゆるやかなスロープとなって上がっている。壁は、基本層序のⅢ層とⅣ層からなっており、崩落箇所もあるが床面から急角度で立ち上がっている。壁高は北壁が13～25cm、西壁13～20cm、南壁21～26cm、出入口部を除いた東壁が17～28cmである。

埋土は、基本層序のⅡ層にあたる黒色シルト質土を基調とし、埋土下部に黒褐色土が混入する。また、壁に近い部分には黒色土とⅢ層（中採浮石層）の混合土がみられるが、これは壁の崩落によるものと思われる。全体的に埋土は粘性があまりなく、しまっている。

床面はⅣ層中に形成されており、中央部にやや凹凸がみられるほかは平坦でしまっている。柱穴・小穴は、壁際及び中央部からP₁～P₁₁が検出された。このうちP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈は深さが40cm以上あり、支柱穴の可能性が高い。また、P₉～P₁₁は出入口部に伴うものと推定される。掘り方の平面形は、方形・長方形を基調となす。柱痕の径は、不詳である。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径 cm	58×36	51×40	40×36	24×19	22×21	38×35	24×19	43×30	41×31	34×27
深さcm	56.5	80	67	35.5	21	43.8	28.8	38	53	36

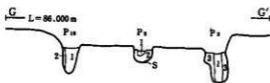
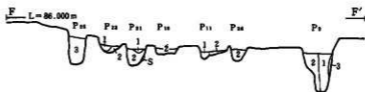
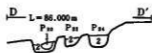
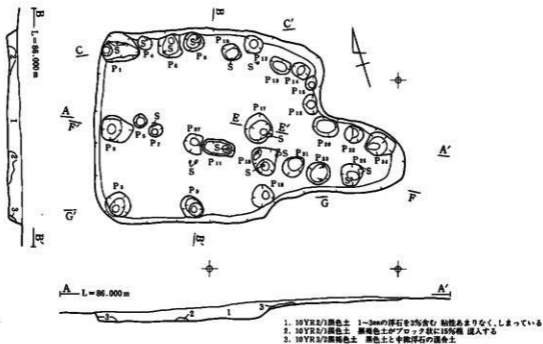
No.	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
径 cm	52×26	31×28	35×24	30×23	22×18	32×22	47×44	44×37	35×35	40×29
深さcm	22	63.7	48	49.5	34	41.5	74.5	25	49.5	18

No.	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆
径 cm	38×30	30×27	37×37	49×36	35×33	30×27
深さcm	37.4	19	20	21	50	2

出土遺物（第14図、写真図版15）

24は美濃灰釉陶器の皿の口縁部で1と同じく15世紀末のものと思われる。25は用途不明の鉄製品で、最大長4.8cm、最大幅1.2cmである。25は角釘で頭部と先端部が欠損している。残存長は4.1cmである。27～30は鉄滓である。31は磨石で、両面に擦痕が認められる。32は無文銭で、半分が欠損している。種類は判別できない。

遺構の形態及び出土遺物から中世後半の住居跡と推定される。



1. 10YR1.7/1黒色土 シルト質土 かくしまっている
 2. 10YR5/2褐色土 かくしまり 粘性に富む
 3. 10YR3/3暗褐色土 黒色土がブロック状に混入する かくしまっている

第12図 4号住居跡

5号住居跡（第13図、写真図版7）

本遺構は、調査区中央のやや南寄りに位置している。本遺構の北側1mに4号住居跡が、南側2.2mに6号住居跡が隣接する。検出は、基本層序Ⅱ層下位からⅢ層上面において、黒色土の方形の落ち込みによって確認されたものである。

平面形は、東西方向に長い長方形を呈し、東壁北端から東の方向に張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面の中央で東西3.9m、南北3.2mを測る。出入口部は上場の計測で長さ1.5m、幅1.6mを測り、床面から検出面へは小さな段をもつが、平均角約20度のスロープとなっており上がっている。

壁は、Ⅲ層からⅣ層上面にかけて形成され、検出面付近では崩落箇所もあるが、床面からは垂直に立ち上がっている。壁高は北壁が39～46cm、西壁36～41cm、南壁31～40cm、出入口部を除いた東壁が28～36cmである。

埋土は黒色シルト質土で構成され、全体的に堅くしまっており、下部は上部に比べて堅さが増している。壁際に中礫浮石の崩落がみられる。

床面は、基本層序のⅣ層中に形成されており、ほぼ平坦で堅くしまっている。小穴・柱穴は壁際にP₁～P₁₀が検出された。柱穴はいずれも方形ないし長方形を基調とする掘り方を有し、径36～82cm、深さ57～103cmを測る。柱痕の径は不詳である。掘り方の形状から柱がやや斜めに設置されているのがみられる。

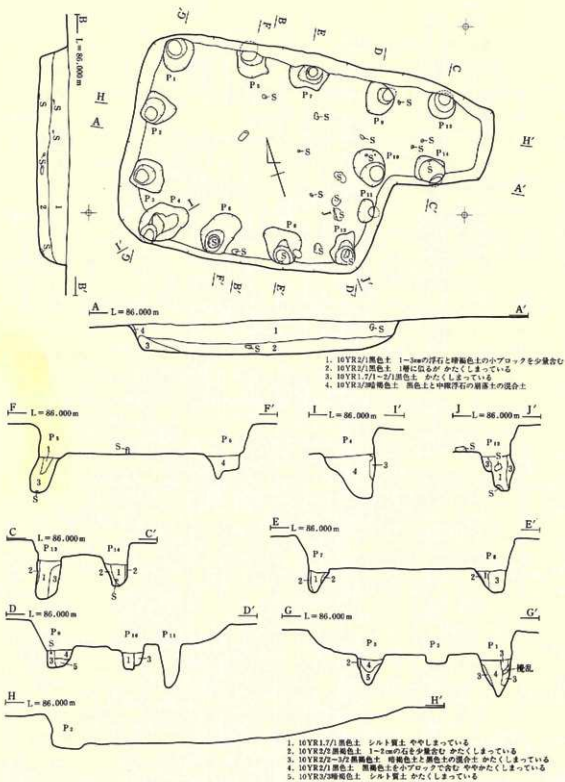
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径 cm	53×49	49×48	52×48	82×58	44×41	70×45	65×36	66×52	54×48	62×50
深さcm	76	64	57	103	68	86	91	73	91	101

No.	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	36×25	56×32	45×39	48×40
深さcm	72	82	68	81

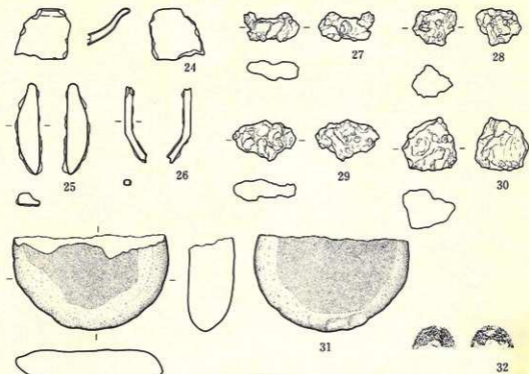
出土遺物（第14・15図、写真図版15）

33は中国製白磁の碗の口縁部で、明代のものと思われる。34・35・37は角釘である。34は先端部が欠損しており、残存長は3.4cmである。35は先端部が屈曲しており、伸ばした長さは3.5cmほどになる。37は頭部が欠損し、先端部が屈曲しているが、残存長は8cmほどになる。36は用途不明の鉄製品で最大長2.6cm、最大幅2.8cm、最大厚0.7cmである。38は鋳銭で、直径は1.7cmである。39～46、48・49は鉄滓である。47は火熱をうけた土にガラス質が付着しており炉壁の一部と思われる。50は磨石で両面に擦痕があり、煤が付着している。

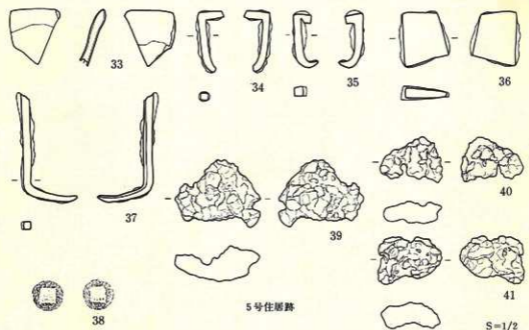
遺構の形態及び出土遺物から、本遺構も中世後半の住居跡と推定される。



第13図 5号住居跡



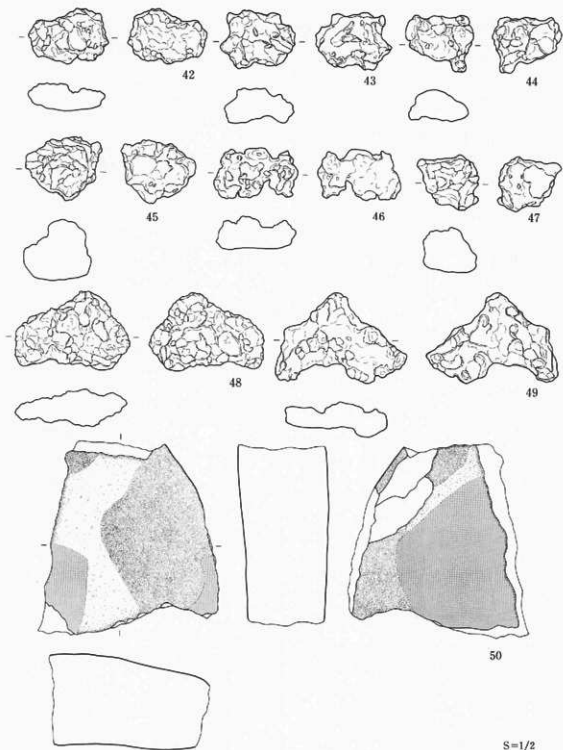
4号住居跡



5号住居跡

S=1/2

第14图 4号・5号住居跡(遺物)



S=1/2

第15図 5号住居跡 (遺物)

6号住居跡（第16図、写真図版8）

本遺構は、調査区中央のやや南寄りに位置している。本遺構の2.2m北側に5号住居跡があり、出入口部北側1.5mには5号土坑がある。検出は、基本層序Ⅱ層下位からⅢ層上面において、黒色土の方形状の落ち込みによって確認されたものである。

平面形は、南北にやや長い長方形を呈し、北壁東端から北の方角に張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面中央で東西3.7m、南北4.1mを測る。出入口部は上場の計測で長さ1.7m、幅1.5mを測り、床面から検出面へは、平均角約8度の非常にゆるやかなスロープとなっており、壁はすべて基本層序のⅢ層中に形成されており、崩落箇所もあるが、床面から急傾斜で外傾して立ち上がっている。壁高は、出入口部を除いた北壁が15~17cm、西壁11~16cm、南壁15~18cm、東壁が15~20cmである。

埋土は、基本層序Ⅱ層に相当する黒褐色土を基調とし、中位から下位にかけて褐色のシルト質土が混入する。また、壁際には中礫浮石層と黒色土の混合土がみられる。

床面は、Ⅲ層下面からⅣ層にかけて形成されており、ほぼ平坦で堅くしまっている。小穴は壁際と中央部付近からP₁~P₁₂が検出された。このうち130cm前後の間隔で配置されるP₁、P₂、P₄、P₅、P₆、P₇、P₁₁、P₁₂は径が31~58cm、深さはほぼ40cm以上あり、主柱穴と考えられる。掘り方の平面形は、方形・長方形を基調となす。柱痕の径は不詳のものが多いが、検出されたものについては10~18cmを測る。

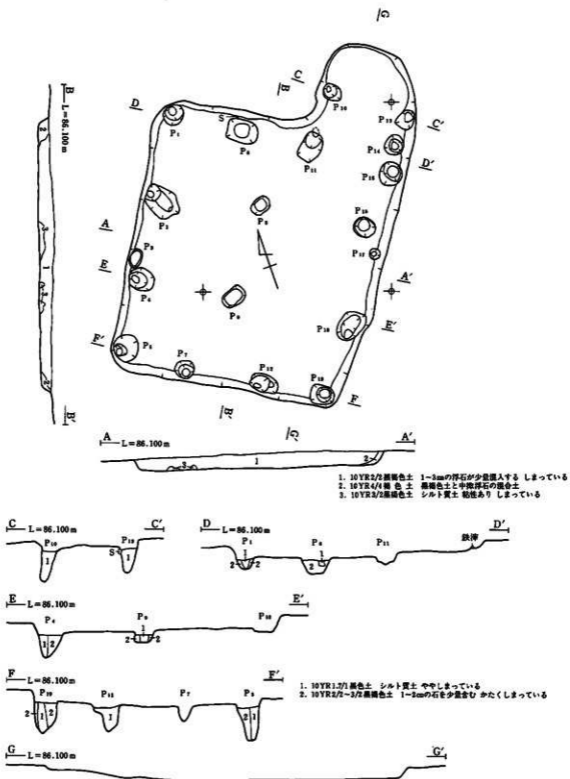
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₂
径 cm	33×30	58×43	30×17	41×34	42×39	49×36	31×28	32×25	39×26	32×23
深さcm	57	53	4	49	57	24	40	20	19	58

No.	P ₁₁	P ₁₀	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉
径 cm	46×33	45×28	31×27	32×30	38×35	35×30	18×17	55×35	38×30
深さcm	78	49	47	31	48	48	35	41	57

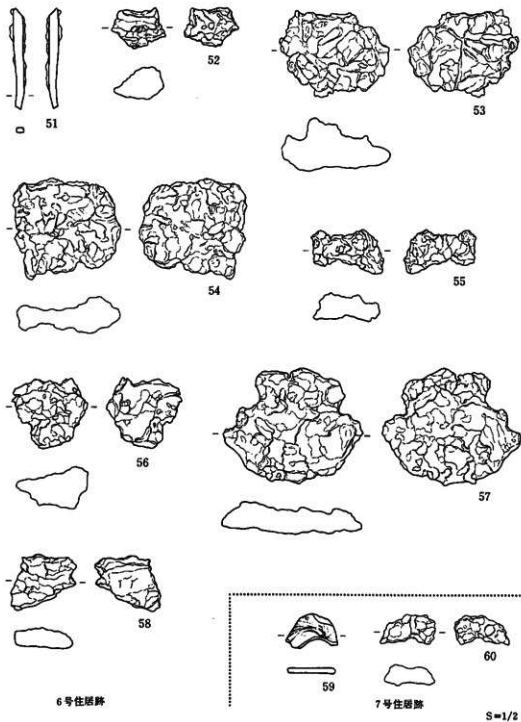
出土遺物（第17図、写真図版16）

51は角釘で、頭部と先端部が欠損している。残存長は5.3cmである。52~57は鉄滓である。58は火熱をうけた土で炉壁の一部あるいは羽口の一部と思われる。53の鉄滓が床面から出土したほかはすべて埋土からの出土である。

遺構の形態及び出土遺物から中世後半の住居跡と推定される。



第16図 6号住居跡



第17图 6号・7号住居跡(遺物)

7号住居跡（第18図、写真図版9）

本遺構は、調査区中央の南東端に位置している。検出は、試掘トレンチでⅢ層中位において黒色土の広がりによって確認されたものである。

平面形は、東西にやや長い長方形を呈し、東壁北端から東の方向に張り出す出入口施設をもつ。規模は、床面中央部で東西4.3m、南北3.7mを測る。出入口部は、調査区域外に延びるため詳細は不明であるが、幅は180cm前後で、ゆるやかなスロープを描いてⅢ層上面まで続いていると思われる。壁はすべてⅢ層中にあり、崩落がみられるものの床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は、北壁が15～24cm、西壁19～25cm、南壁19～29cm、出入口部を除いた東壁が20～25cmである。なお、南壁の東端部が農耕によって削り取られている。

埋土は、黒褐色、暗褐色のシルト質土で構成され、全体に1～3mm程度の浮石を少量混入し、堅くしまっている。また、中位にはⅣ層起源と思われる褐色の砂質シルトのブロックが散在する。埋土の堆積状況は、褐色土の混入が不自然なことから見て、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

床面はⅣ層上面に形成されており、平坦で堅くしまっている。小穴は、壁際と床面中央からP₁～P₁₁を検出した。このうち170cm前後の間隔で配置されるP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₇、P₈、P₉、P₁₀は径35～58cm、深さは60cm以上あり、支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は方形ないし長方形を呈する。柱痕の形は不詳のものが多く、確認できたもので10～20cmを測る。

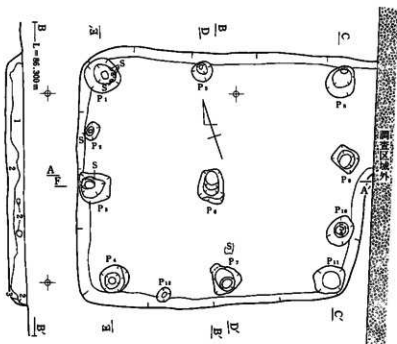
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	58×55	27×20	50×47	45×42	35×32	55×38	50×48	53×47	41×35	50×38
深さcm	83	24	61	85	65	88	82	90	79	30

No.	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	51×45	25×19
深さcm	88	11

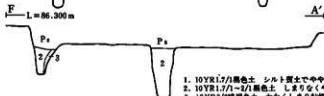
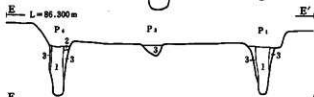
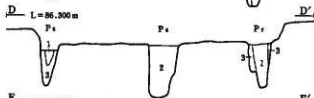
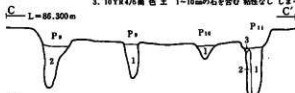
出土遺物（第17図、写真図版16）

59は明代のもと思われる染付の皿の底部である。これは、床面中央の柱穴から出土したものである。60は埋土から出土した鉄滓である。

遺構の形態及び出土遺物から中世後半の住居跡と考えられる。



1. 10YR2/7黄褐色土 1-3mmの浮石が混入 粘性あり しまっている
2. 10YR2/4黄褐色土 暗褐色土が1-5mmのブロック状に混入する
3. 10YR4/6黄褐色土 1-10mmの石を含む 粘性なし しまっている



1. 10YR1/7黄褐色土 シルト質土でややかたくなっている
2. 10YR1/7-2/1黄褐色土 しまりなくやわらかい 黄褐色土のブロックが混入する
3. 10YR3/9黄褐色土 かつくしまり粘性に富む

第18図 7号住居跡

2. 土坑

1号土坑 (第19図、写真図版10)

本土坑は、調査区北部に位置している。検出は、中礫浮石層上面において明赤褐色の焼土の広がりによって確認されたものである。

平面形は、南北方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は開口部径342×130cm、底部径321×114cm、深さ12~19cmである。断面形は、皿状を呈し、壁は外傾する。底部はⅢ層中にあり、堅くしまっている。

埋土は9層に細分され、上位は明赤褐色やにぶい黄褐色、にぶい黄橙の焼土に黒褐色土・中礫浮石・炭化物が混じり、

下位は黒~黒褐色土で1mm程度の浮石を伴う。遺物は出土せず、時期は不明である。



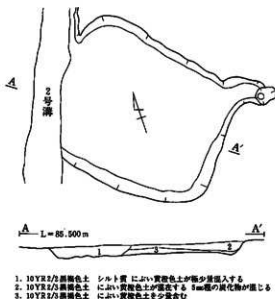
第19図 1号土坑

2号土坑 (第20図、写真図版10)

本土坑は調査区北部西寄りに位置し2号溝の下位に重複して検出された。

平面形は、東西方向にやや長い隅丸方形を呈し、西側が溝によって切られている。また北東コーナーは、新規のものと思われる柱穴状小土坑によって攪乱を受けている。規模は、開口部径278×238cm、底部径260×205cm、深さ13~24cmを測る。断面形は皿状を呈し、壁は、外傾して底面から立ち上がっている。底部はⅢ層中にあり、ほぼ平坦で堅くしまっている。

埋土は3層に分けられ、上位はにぶい黄褐色土と黒褐色土が混在し、5mm程度の炭化物が少量含まれる。下位は黒褐色土が主体で黄褐色土が少量混入する。溝による攪



第20図 2号土坑

乱部分は黒褐色土で土坑内部まで広がっている。遺物は出土せず、時期は不明である。

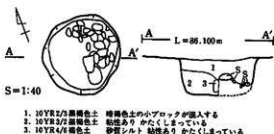
3号土坑 (第21図、写真図版11)

本土坑は、調査区中央部東寄りに位置している。検出は、中礫浮石層上面において黒色土の円形の広がりによって確認されたものである。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径83×80cm、底部径75×73cm、深さ23～45cmである。断面形はピーカー状を呈し、壁はやや外傾気味である。底部

はIV層中であり、堅くしまっており、傾きや凹みがみられる。また、底部の東半分には5～17cm程の隙が敷かれている。埋土は3層に分かれ、上位は黒褐色土に暗褐色土の小ブロックが混在する。下位は、黒褐色土で褐色土のブロックが混入している。

遺物61 (第23図、写真図版16) は、両面に使用痕をもつ磨石で、石質は輝石安山岩である。



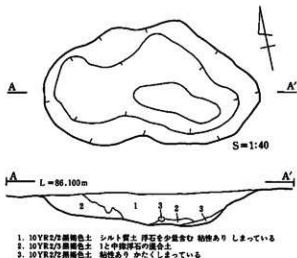
第21図 3号土坑

4号土坑 (第22図、写真図版11)

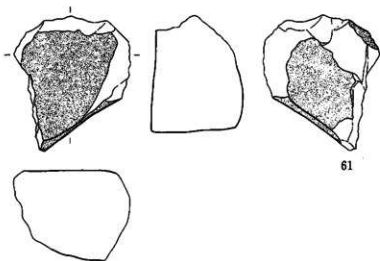
本土坑は、調査区中央部東寄りに位置している。検出は、中礫浮石層上面において黒色土の落ち込みによって確認されたものである。

平面形は、東西方向に長い不整形円形を呈し、規模は開口部径230×117cm、底部径95×31cm、深さ25～36cmである。断面形は、鉢状を呈し、壁は30度前後の勾配で外傾して立ち上がる。底部はIII層中であり、しまっている。

埋土は3層に分けられ、黒褐色土及び黒褐色土と中礫浮石の混合土が主体である。

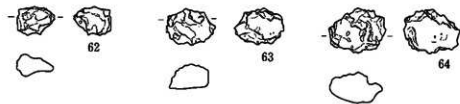


第22図 4号土坑



61

3号土坑



62

63

64



65

66

4号土坑

S=1/2

第23图 3号·4号土坑(遗物)

出土遺物は、鉄滓が3点(62~64)と炉壁の一部が2点(65・66)出土している。(第23図、写真図版16)

鉄滓及び炉壁が出土したことから、中世の住居跡に伴う遺構と考えられる。

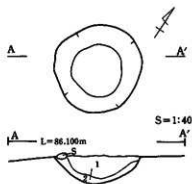
5号土坑(第24図、写真図版11)

本土坑は、調査区中央部の5号住居跡と6号住居跡の間に位置している。検出は、中礫浮石層上面において黒色土の円形の広がりによって確認されたものである。

平面形は円形で、規模は開口部径94×90cm、底部径54×54cm、深さ25~28cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は40度前後の勾配で外傾して立ち上がっている。底部はⅢ層中であり、ややもろい。

埋土は2層に分けられ、上位は中礫浮石が少量混入する黒色土で、下位は中礫浮石を含む黒褐色土である。

埋土の上面から火熱を受けた石が検出されたが、遺物は出土せず、時期は不明である。



1. 10YR1.7/1黒色土 シルト質土でかたくしめる 浮石を少量混入
2. 10YR2/2-3/2黒褐色土 中礫浮石との混合土でかたくしめる

第24図 5号土坑

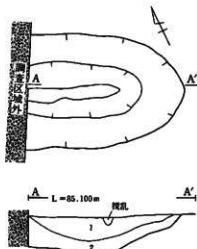
6号土坑(第25図、写真図版12)

本土坑は、調査区中央部西端に位置している。遺構の一部が調査区域外にあるために詳細な形態・規模は不明である。検出は、中礫浮石層上面において黒色土の広がりによって確認されたものである。

平面形は東西方向に長い楕円形と推定される。規模は開口部短径が180cm前後、底部短径が25cm前後、深さ50~70cmと推定され、断面形は鉢状を呈する。壁は底面からゆるやかに傾斜して立ち上がっている。底部はⅢ層中であり、ゆるやかに湾曲している。

埋土は2層に分けられ、上位は黒色土、下位は黒褐色土で暗褐色土の小ブロックが混入している。

出土遺物はなく、時期は不明である。



1. 10YR1.7/1黒色土 シルト質 かなかくしめる浮石を少量混入
2. 10YR2/1-3/1黒色-黒褐色土 暗褐色土が小ブロックで混入

第25図 6号土坑

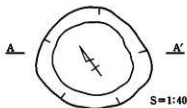
7号土坑 (第26図、写真図版12)

本土坑は、調査区中央部南寄りに位置している。検出は、中礫浮石層上面において黒色土の円形の広がりによって確認されたものである。

平面形は円形を呈し、規模は開口部径123×106cm、底部径88×76cm、深さ11~12cmである。断面形は皿状を呈し、壁は崩落箇所がみられるもののほぼ直に立ち上がっている。底部はⅢ層中にあり、平坦でしまっている。

埋土は基本的には黒色土の単層で、壁際に壁の崩落による中礫浮石と黒色土の混合土がみられる。

出土遺物はなく、時期不明である。



1. 10VR1.7/1 黒色土 かたくしまり粘性に富む 浮石を少量混入
2. 10VR2.7/2 黒褐色土 壁崩落による中礫浮石との混合土

第26図 7号土坑

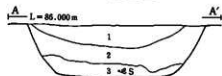
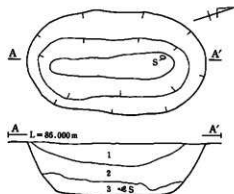
8号土坑 (第27図、写真図版12)

本土坑は、調査区南側中央に位置している。検出は、中礫浮石層上面において黒色土の広がりによって確認されたものである。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は開口部径285×163cm、底部径197×37cm、深さ77~84cmである。断面形は鉢状を呈し、壁は50度前後の勾配で立ち上がる。底部はⅣ層中にあり、平坦で堅くしまっている。

埋土は3層に分かれ、上位から中位にかけては浮石を少量含む黒色土で、下位はⅣ層起源の暗褐色土の小ブロックが混入する黒褐色土である。なお、埋土上位から中位にかけ、径5~20cmの垂角礫が数個出土している。

出土遺物はなく、時期不明である。



1. 10VR1.7/1 黒色土 シルト質土 浮石を少量混入し、やや粘性あり
2. 10VR2.7/1 黒色土 シルト質土 1より浮石の減少する
3. 10VR2.7/2 暗褐色土 砂質シルト かたくしまっている

第27図 8号土坑

3. 掘立柱建物跡 (第28図)

本遺構は調査区中央部の3号住居跡、6号住居跡、7号住居跡、柱穴列で囲まれた地点に位置している。検出面は中塚浮石層上面である。

規模は桁行3間(4.7m)、梁行2間(4.0m)の東西棟である。桁行北側間尺は西から1.8m、1.4m、1.5m(現行尺6.0尺、4.7尺、5.0尺)で、南側間尺は1.7m、1.4m、1.4m(現行尺5.7尺、4.7尺、4.7尺)である。梁行西側間尺は2.3m、1.7m(現行尺7.7尺、5.7尺)で、東側間尺は2.4m、1.6m(現行尺8.0尺、5.3尺)である。柱穴間の平均スパンは、桁行が1.5m、梁行が2.0mである。

柱穴の掘り方はほぼ円形で、径22~48cm、深さ37~72cmの規模をもつ。柱痕は確認できなかった。埋土は黒褐色土の単層のものが多いが、上位に黒色土をのせるもの、下位に暗褐色土が堆積するものもみられる。

本遺構は遺物を伴わず時期不明である。

4. 柱穴列 (第28図)

本遺構は調査区中央南側に位置し、掘立柱建物跡の南面に沿って並んでいる。検出面は中塚浮石層上面である。

本遺構は5柱穴一連のものと考えられ、ほぼ東西に直線的に並ぶ。柱穴は西端から2.0m・1.8m・1.75m・1.35mの4間に配列され、これを尺に換算すると6.7尺・6尺・5.8尺・4.5尺となる。柱穴の規模は下表のとおりであるが、掘り方の径31~39cm、深さ38~67cmで、平面形は開口部、底部ともほぼ円形を呈する。埋土は主に黒色土及び黒褐色土で構成される。柱痕の径は不詳である。

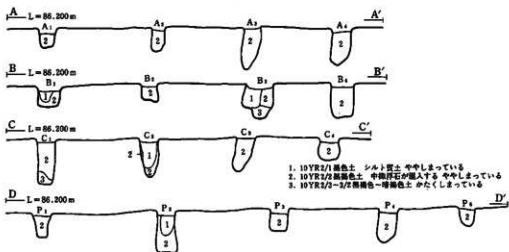
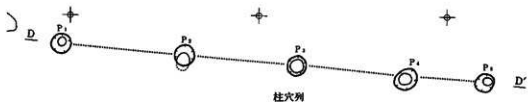
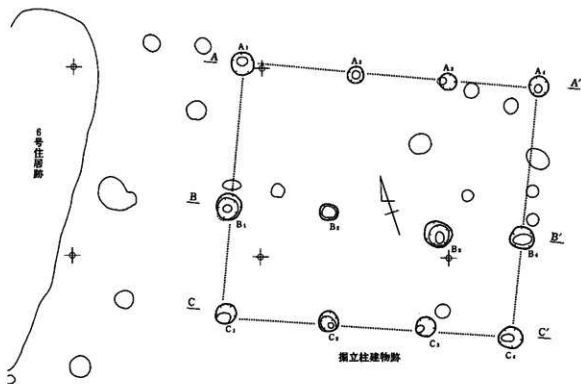
出土遺物 (第32図、写真図版16)

P₁柱穴から出土した68は中国製青磁の碗の破片である。また、P₄柱穴から鉄滓が1点出土している。

出土遺物から、中世の住居跡に伴う遺構と考えられる。

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	31×30	32×27	32×29	39×30	32×28
底部径	13×12	28×21	22×22	21×18	15×13
深さ	38	67	35.5	57	41.5

(単位cm)



第28図 掘立柱建物跡・柱穴列

5. 溝 跡

1号溝 (第29図、写真図版13)

本遺構は、調査区北部東寄りに位置し、東西に延びる。溝の東側は調査区域外に続き、西側は市道の下に続くものの市道の手前で自家水道の井戸によって壊されている。検出は基本層序のⅡ層下位からⅢ層上面にかけて広がる黒色土によって確認されたものである。全長は約5.5 m、幅は70～80cm前後、深さは16～22cm程である。断面形は浅い皿形やV字形である。壁及び底面はⅢ層中にあり、底面にやや凹凸のみられる部分もある。

埋土は、Ⅱ層起源の黒色土が主体であり、中礫浮石が少量混入する。砂質土や泥質土などは全くみられず、水が常時流れたような痕跡は埋土の堆積状況からは観察されない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

2号溝 (第29図、写真図版13)

本遺構は、調査区北部西寄りに位置し、南北に延びている。溝の南側は調査区域外に続き、北側は市道の下に続いている。市道を挟んだ北側では溝は検出されておらず、西側に曲がって続くか、東側に曲がって1号溝と合流するものと思われる。また、本遺構は2号土坑と重複している。検出は基本層序のⅡ層下位からⅢ層上面にかけての黒色土の広がりによる。全長は約44m、幅50～80cm前後、深さ15～20cm程である。断面形は浅い皿形や逆台形で、北側では部分的に2段になるところもみられる。壁及び底面はⅢ層中にあり、壁面や底面には不規則な凹凸がみられる。

埋土は、Ⅱ層起源の黒色土が主体であり、中礫浮石が少量混入する。砂質土、泥質土は全くみられない。

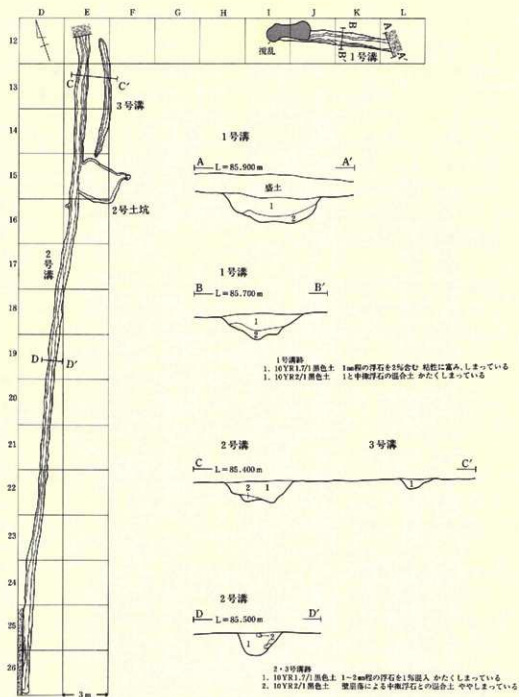
遺物の出土はなく、時期不明である。

3号溝 (第29図、写真図版13)

本遺構は、調査区北部西寄りに位置し、2号溝とほぼ平行して南北に延びている。検出は基本層序のⅡ層下位からⅢ層上面にかけての黒色土の広がりによる。規模は全長約8 m、幅30～50cm前後、深さ5～8 cm程である。断面形は浅い皿形を呈している。

埋土は堅くしまった黒色土の単層で、ごく少量の浮石が含まれている。

遺物の出土はなく、時期不明である。



第29図 溝跡

6. 柱穴状土坑群 (第30・31図)

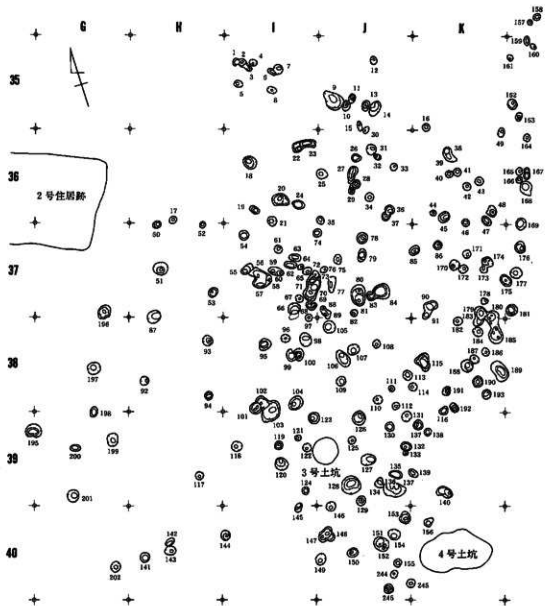
柱穴状の小土坑は、調査区中央部東側の東西約15m、南北約40mの範囲に分布している。分布密度にはバラツキがあり、2号住居跡東側の密度が高い。柱穴列及び掘立柱建物跡の柱穴を除いた検出数は330基である。規模は長径で15cm～75cmの範囲にあり、10～19cmが8基(2.4%)、20～29cmが116基(35.2%)、30～39cmが135基(40.9%)、40～49cmが50基(15.2%)、50～59cmが15基(4.5%)、60～69cmが2基(0.6%)、70～75cmが4基(1.2%)で、20～39cmの大きさのものが251個と全体の4分の3強を占めている。深さは7～77.5cmの範囲にあり、10cm未満が11基(0.3%)、10～19cmが50基(15.2%)、20～29cmが70基(21.2%)、30～39cmが92基(27.9%)、40～49cmが63基(19.1%)、50～59cmが32基(9.7%)、60～69cmが11基(3.3%)、70cm以上が1基(0.3%)あり、比較的浅いものが多い。因に柱穴列と掘立柱建物跡の柱穴の規模は、長径が20～29cmのものが3基(17.6%)、30～39cmが12基(70.6%)、40～49cmが2基(11.8%)で、深さは30～39cmのものが4基(23.5%)、40～49cmが3基(17.6%)、50～59cmが4基(23.5%)、60～69cmが5基(29.4%)、70cm以上が1基(1.2%)となっており、柱穴状土坑と比べてやや大きく、深くなる傾向にある。

平面形をみると、最も多いのは円形の130基(39.4%)で、以下楕円形の126基(38.2%)、長方形の47基(14.2%)、方形の27基(8.2%)となり、円形と楕円形を含めた円系統が大多数を占める。

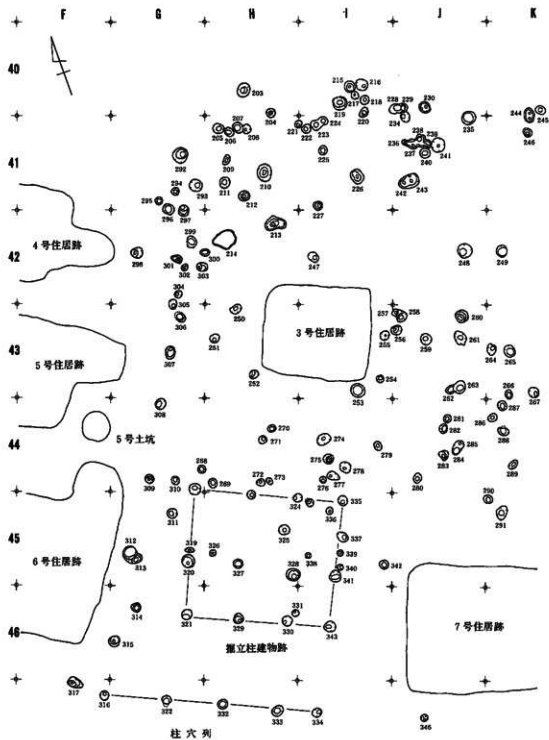
出土遺物 (第32図、写真図版16)

遺物を出土した柱穴状土坑は14基である。67は鉄軸陶器の口縁部で、肩衝のものと思われる。68は中国産青磁の碗の破片で、柱穴列P、柱穴とした柱穴状土坑からの出土である。69は陶器の碗の口縁部で、船載のものと思われる。79～79は鉄製品である。72は角釘状の鉄製品で頭部が環状を呈している。73は角釘で、先端部が欠損しており、残存長は2.8cmである。74も角釘で中央部付近から湾曲しており、全長は5.2cmほどである。76は小札で、約1cmの間隔で2列に穴があけられている。79は刀子の先端部で残存長は2.2cmである。他の鉄製品については用途不明である。80は洪武通寶、81～84は鉄滓である。

遺物が出土した柱穴状土坑については住居跡に伴う遺構と考えられるが、他の大部分については時期を特定することができない。



第30图 柱穴状土坑群 (I)



第31图 柱穴状土坑群(2)

表2 柱状土坑計測表(1)

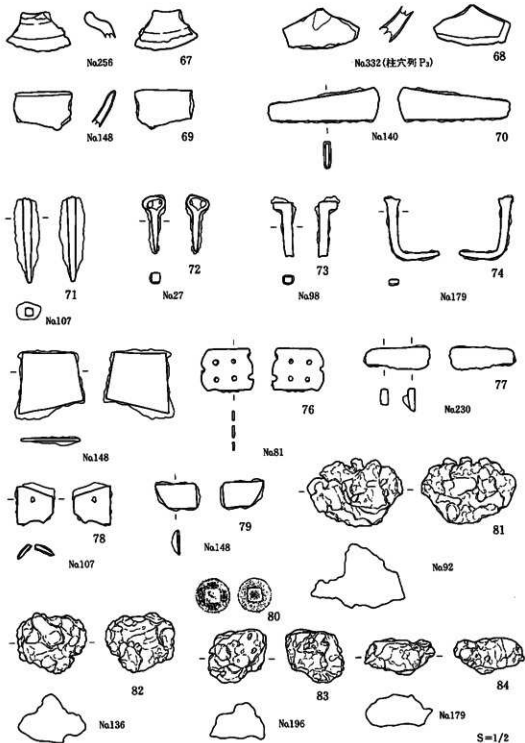
グリッド	№	径	高さ	形状	遺物	備考	グリッド	№	径	高さ	形状	遺物	備考
I35	1	25×22	12	楕円形		2と重複	I37	61	25×23	29	円形		
	2	25×23	21	円形		1と重複		62	41×22	26	楕円形		
	3	24×17	14	楕円形		2と重複		63	35×22	20	長方形		
	4	25×30	30	楕円形				64	18×14	16	楕円形		
	5	28×21	23.5	楕円形				65	30×21	32	楕円形		
	6	30×15	11	楕円形		7と重複		66	40×34	14	楕円形		
	7	30×30	30	円形		6と重複		67	25×25	23	円形		
	8	30×19	23	楕円形				68	35×22	24	長方形		
	J35	9	70×53	26	楕円形			69	42×35	32	楕円形		70と重複
	10	32×25	21	楕円形				70	23×21	43	円形		69と重複
	11	31×19	22	楕円形				71	30×15	39	楕円形		70と重複
	12	22×20	24	円形				72	30×20	20	円形		71と重複
	13	32×20	30	楕円形				73	17×15	15	方形		72と重複
	14	52×31	12	楕円形				74	26×25	23	円形		
	15	29×14	20	楕円形				J37	75	30×24	47	楕円形	
K35	16	23×23	28	円形		76	20×19	14.5	方形				
H36	17	25×22	18.5	円形		77	47×20	12	長方形				
I36	18	43×36	32	円形		78	34×33	36	円形				
	19	32×21	26	楕円形		79	39×25	26	長方形				
	20	54×35	45	長方形		80	30×25	45	楕円形		81と重複		
	21	30×28	13.5	円形		81	40×39	48	円形	小札	80と重複		
	22	30×30	34.5	方形		82	30×28	26	円形				
	23	50×19	31	長方形		83	29×24	27	楕円形		84と重複		
	24	39×26	35	楕円形		84	52×48	31	楕円形		83と重複		
	J36	25	34×30	32	円形		K37	85	47×28	29	楕円形		
	26	30×23	23	楕円形		86	27×26	28	円形				
	27	56×24	13	長方形		H37	87	46×38	55	円形			
28	26×25	20	円形		J37	88	18×15	23	円形		89と重複		
29	24×16	17	楕円形		89	25×22	21	楕円形		88と重複			
30	23×16	23	長方形		K37	90	45×26	40	楕円形		91と重複		
31	34×32	59	円形		91	25×17	11	楕円形		90と重複			
32	24×16	37	楕円形		H38	92	28×28	43	円形	鉄滓			
33	23×21	18	円形		93	34×30	20	方形					
34	29×27	40	円形		94	25×24	38.5	円形					
35	24×21	31	円形		I38	95	39×38	54	長方形				
36	31×28	31.5	円形		96	30×24	30	楕円形					
37	27×25	22	円形		97	23×23	22	円形					
K36	38	26×22	48	円形		98	42×38	43	楕円形		鉄製品		
	39	30×25	31	長方形		99	37×25	27	長方形		100と重複		
	40	23×22	11.5	円形		100	38×28	35	楕円形		99と重複		
	41	26×24	14	円形		I38	101	37×36	14	円形		102と重複	
	42	25×24	22	円形	鉄滓	102	43×26	22	長方形		101と重複		
	43	28×28	28	円形		103	73×45	29	楕円形		102と重複		
	44	19×12	23	円形		104	48×36	41	長方形				
	45	38×31	47.5	楕円形		J38	105	39×38	40	円形			
	46	22×22	14.5	円形		106	55×35	59.5	楕円形				
	47	35×21	37	長方形		107	40×34	37	楕円形	鉄製品			
48	28×28	38.5	方形		108	25×20	19	楕円形					
49	28×20	27	楕円形		109	28×27	52	円形					
H37	50	26×23	15	円形		110	26×26	19	円形				
	51	47×41	36	楕円形		111	20×17	8	円形				
	52	21×19	22	円形		112	23×20	9	円形				
	53	32×26	35.5	楕円形		113	30×26	32	楕円形				
I37	54	30×29	9	円形		K38	114	26×26	24	円形			
	55	46×25	11	楕円形		115	58×38	52	長方形				
	56	40×30	34	方形		116	28×24	8	方形				
	57	55×25	38	長方形		H39	117	25×25	38	円形			
	58	20×19	33	方形		I39	118	34×31	31.5	円形			
	59	25×23	14	楕円形		119	26×25	31.5	円形				
	60	23×18	14	楕円形		120	41×38	46	円形				

表3 柱穴土坑計測表(2)

グリッド	No	径	深さ	形状	遺物	備考	グリッド	No	径	深さ	形状	遺物	備考
	121	19×17	8.5	円形			L37	181	37×33	48	円形		
	122	25×24	33.5	円形			K38	182	29×25	15	円形		
	123	36×34	38	円形				183	30×25	13	楕円形		179と重複
	124	23×21	33.5	円形				184	30×29	35	円形		
J39	125	25×22	47.5	円形				185	56×48	22.5	楕円形		180と重複
	126	45×41	38	円形				186	26×23	26	円形		
	127	43×31	26	長方形				187	28×25	40	方形		
	128	59×56	30.5	円形				188	39×37	38.5	円形		
	129	32×29	31	円形				189	68×39	95	長方形		
	130	29×28	33	円形				190	33×30	32	円形		
	131	34×31	16.5	楕円形				191	27×25	38.5	方形		
	132	32×27	32	楕円形				192	31×23	35.5	長方形		
	133	16×16	7	円形				193	30×25	38	楕円形		
	134	32×29	32	楕円形			E39	194	51×39	44	長方形		
	135	41×21	33.5	楕円形			F39	195	51×36	36	楕円形		
	136	72×43	56	楕円形	鉄滓		G37	196	46×38	36	楕円形	鉄滓	
K39	137	31×30	17	円形			G38	197	40×36	32	円形		
	138	24×20	5.5	楕円形			G39	198	32×21	7	楕円形		
	139	30×20	23	楕円形				199	40×34	42	楕円形		
	140	52×29	47	楕円形	鉄製品			200	32×18	7	楕円形		
H40	141	32×30	38	円形			G39	201	39×36	43	円形		
	142	30×18	17	楕円形			G40	202	33×31	42	円形		
	143	34×29	46	楕円形			H40	203	46×38	44	楕円形		
I40	144	32×30	33.5	楕円形				204	29×28	35.5	方形		
	145	28×21	17.5	楕円形			H41	205	35×30	29	楕円形		
J40	146	30×28	32.5	円形				206	32×26	12.5	楕円形		
	147	44×22	53.5	楕円形		148と重複		207	35×30	42.5	長方形		
	148	45×25	59	楕円形	鉄製品・陶器片	147と重複		208	30×27	13	円形		
	149	35×28	48.5	楕円形				209	35×20	15	楕円形		
	150	36×28	36	楕円形				210	55×43	42	楕円形		
J40	151	40×29	36.5	楕円形		152と重複		211	36×33	41	楕円形		
	152	38×18	34	楕円形		151と重複		212	35×32	51.5	楕円形		
	153	36×33	31.5	楕円形			H42	213	67×42	28	楕円形		
	154	36×35	52.5	円形				214	75×59	5.5	楕円形		
	155	25×25	29	円形			I40	215	38×36	39.5	楕円形		
K40	156	35×22	35.5	楕円形				216	38×37	63	円形		
L34	157	15×13	15	円形				217	25×23	25	円形		
	158	23×18	18	楕円形				218	29×28	28	円形		
L35	159	26×18	8	楕円形				219	45×43	56	円形		
	160	20×13	15	楕円形				220	34×23	28.5	楕円形		
	161	20×16	16	長方形			I41	221	23×22	46	方形		
	162	35×30	29	楕円形				222	30×27	48	方形		
	163	25×19	26.5	楕円形				223	32×30	44.5	楕円形		224と重複
L36	164	21×21	27	円形				224	33×26	31	楕円形		223と重複
	165	24×23	36	円形				225	28×28	38	円形		
	166	23×17	29	円形				226	45×37	40	長方形		
	167	38×18	25	長方形				227	30×28	48	円形		
	168	42×38	51	方形			J40	228	38×30	47	楕円形		229と重複
	169	37×32	56	楕円形				229	25×23	66	円形		228と重複
K37	170	32×30	13	方形				230	40×35	40	楕円形	鉄製品	
	171	25×25	16	円形				231	25×20	28	長方形		
	172	29×36	19	円形				232	29×28	25	円形		
	173	25×24	23	円形				233	25×24	23.5	円形		
	174	38×30	38.5	楕円形			J41	234	34×28	58	長方形		
	175	40×28	34.5	長方形				235	44×41	54	円形		
L37	176	34×30	77.5	方形				236	20×13	13.5	楕円形		237と重複
	177	38×35	23	円形				237	30×27	18.5	長方形		236と重複
K37	178	22×20	16	円形				238	38×28	32	長方形		237と重複
	179	41×36	50	方形	鉄製品・鉄滓	183と重複		239	30×20	24	長方形		238と重複
	180	45×42	41	円形		185と重複		240	33×29	11.5	長方形		

表4 柱穴状土坑計測表(3)

グリッド	No.	径	深さ	形状	遺物	備考	グリッド	No.	径	深さ	形状	遺物	備考
J41	241	46×43	36	円形			G41	295	25×22	25.5	円形		
	242	32×30	51.5	円形		343と重複		296	35×30	42	長方形		
	243	42×41	58	円形		342と重複		297	35×32	50	円形		
K40	244	33×27	29	楕円形			G42	298	37×31	61.5	長方形		
	245	47×32	35.5	楕円形				299	36×28	36	長方形		
K41	246	32×23	43.5	長方形			G42	300	30×22	21	楕円形		
	247	35×26	43	長方形				301	35×22	47	楕円形		
J42	248	44×42	61.5	円形			302	25×18	15	長方形			
K42	249	35×34	53	円形			303	35×26	50	楕円形			
H43	250	27×25	54	長方形			304	24×22	44.5	円形			
	251	31×25	31	長方形			305	32×24	50	楕円形			
	252	29×23	44	長方形			306	30×27	48	楕円形			
	253	47×41	17	円形			307	40×27	53	楕円形			
I43	254	23×22	43	円形			308	34×32	61	円形			
	255	32×28	41	円形			309	29×25	43	円形			
J43	256	35×30	55	円形	鉄輪陶器片		310	25×25	40	円形			
	257	22×20	41	方形		256と重複	G45	311	31×29	34	円形	洪武通宝	
258	29×26	48	楕円形		257と重複	312		40×40	48	方形		313と重複	
259	37×33	47	長方形			313	35×23	41	長方形		312と重複		
260	39×38	62.5	方形			G46	314	30×28	48	円形			
261	45×35	26	楕円形				315	35×33	52	円形			
262	30×24	40	楕円形		263と重複	F47	316	31×30	38	円形		柱穴列	
263	45×35	61	楕円形		262と重複	317	50×30	38	長方形				
K43	264	34×26	52	長方形			G44	318	36×36	61	円形		建物跡
	265	36×34	38.5	楕円形			G45	319	30×16	22	楕円形		
266	29×22	33.5	楕円形			320	42×40	36.5	円形		建物跡		
267	32×30	63	長方形			G46	321	32×32	71.8	円形		建物跡	
G44	268	27×25	34	円形			G47	322	32×27	67	楕円形		柱穴列
	269	29×25	35.5	楕円形			H45	323	26×26	40.8	円形		建物跡
H44	270	25×22	35	方形			324	28×26	66.5	円形		建物跡	
	271	25×24	34	円形			H45	325	35×32	68	円形		
272	29×25	42.5	方形			325	21×39	28.5	方形				
273	24×18	42	楕円形			327	29×25	37	長方形			建物跡	
I44	274	45×34	56	長方形			328	44×38	67	長方形			建物跡
	275	32×30	48	円形			H46	329	33×30	63.5	楕円形		建物跡
276	24×21	31	円形			330	32×32	55.3	円形			建物跡	
277	42×26	63	長方形			331	24×22	41.5	円形				
278	36×33	47	方形			H47	332	32×29	33.5	円形	青磁片	柱穴列	
279	28×23	25	楕円形			333	39×30	57	長方形	鉄滓	柱穴列		
J44	280	32×25	35	楕円形			I45	334	25×24	28	方形		
	281	25×23	26	円形				335	33×30	59	円形		建物跡
282	30×25	35	楕円形			336	24×24	33	円形				
283	30×30	19	方形			337	40×30	40	楕円形				
284	27×24	59	楕円形			338	18×18	29	円形				
285	26×23	47	方形			339	20×20	12	円形				
K44	286	29×25	30	円形			340	20×19	34.2	円形			
	287	29×28	36	円形			341	38×36	59	方形			建物跡
G41	288	36×24	47	楕円形			342	30×25	26.2	楕円形			
	289	32×23	41.5	楕円形			I46	343	38×34	42.3	楕円形		建物跡
290	30×25	34	楕円形			I47	344	32×28	41.5	方形			柱穴列
291	45×34	19.5	楕円形			I45	345	33×36	27	楕円形			
292	47×45	55.5	円形			I47	346	22×22	30	円形			
293	41×38	35.5	円形			G47	347	24×23	67	円形			
294	26×24	38.5	円形										



第32圖 柱穴状土坑 (遺物)

7. 遺構外出土遺物 (第33・34・35図、写真図版17)

今回の調査で遺構外から出土した遺物は、石器・土器・鉄製品・鉄滓等である。

石器

85は凸基の有基石鏃である。両面からの調整加工によって整形され、鋭い尖頭部をもつ。石質はチャートである。86は磨石で、欠損しているが、全面に使用痕をもつ。石質は輝石安山岩である。87は砥石で、4面とも非常に滑沢で細く小さな線状痕を伴っている。石質は細粒凝灰岩である。

土器

縄文土器はⅡ層から細片でごく少量出土している。粗製の土器がほとんどで摩滅しているものも多い。いずれも流れこみによるものと思われる。

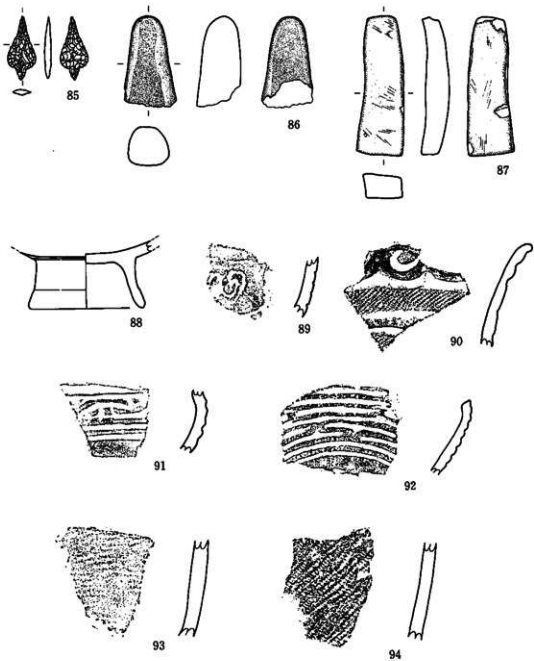
88は台付鉢の台部で、文様は施されていない。89は縄文の施文がなく、細い沈線でU字状の文様が施文されている。細片のため器種は不明である。90は外反する波状口縁をもつ鉢形土器の口縁部である。口縁部に三叉文が施され、その下部は2本の太い沈線で区画され縄文が充填されている。内外とも丁寧なミガキがなされている。91は鉢形土器の口縁部付近である。上下の平行沈線間に羊歯状文が施文されている。内面にすすのような付着物がみられる。92は浅鉢の口縁部で、縄文の地文の上に沈線によって工字文が施されている。内面には、すすのような付着物がみられる。92・93は粗製の土器で93はLR、94はRLの単節斜行縄文が施されている。

鉄製品

95から101は角釘である。残存長は95が3.5cm、96が4.4cm、97が4.9cm、98が5.7cm、99が6.8cm、100が7.5cm、101が8.1cmである。102・103は器種を特定することができない。104は両端が欠損しているが刀子の一部と思われる。105～108は器種不明である。109は小札で、約1cm間隔で2列12個の穴が空けられている。110～112も器種不明である。110は太さ0.5cmほどの鉄の棒が環状に曲げられている。111は鉄製の器の底部の一部と推定される。

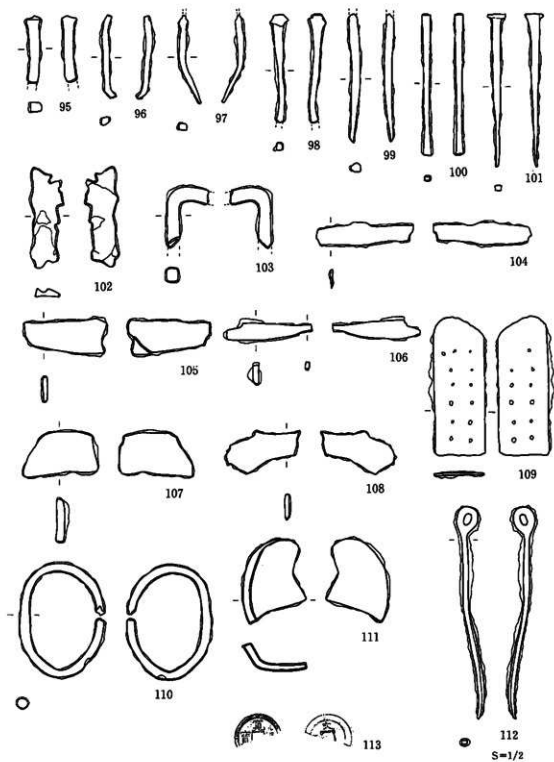
その他の出土遺物

113は寛長通寶で半分が欠損している。114は羽口の一部、115は炉壁の一部と推定される。116～123は鉄滓である。鉄滓は遺構外から全部で1032g出土している。

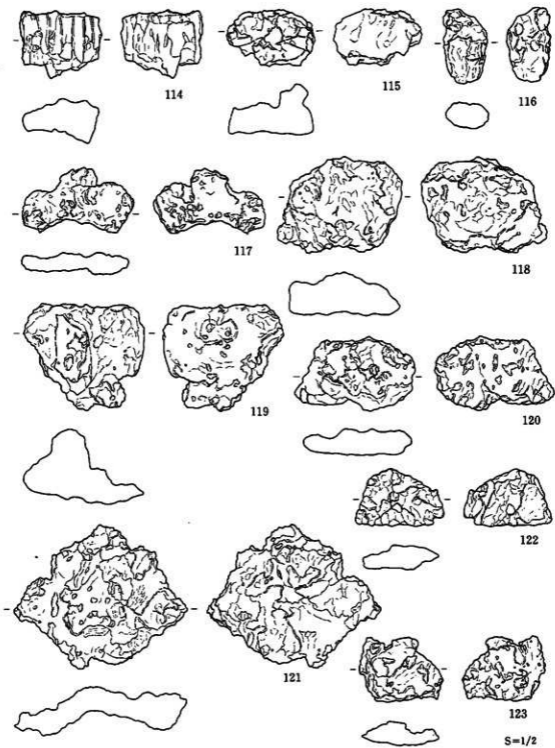


S=1/2

第33圖 遺構外出土遺物 (1)



第34图 遼構外出土遺物 (2)



第35图 遺構外出土遺物(3)

V まとめと考察

本項では竪穴住居跡について若干の考察を加え、まとめとする。

八ツ長Ⅱ遺跡で検出された7棟の竪穴住居跡は次のような特徴をもっている。

- ・平面形は方形に近く、5棟が出入口施設と思われる張り出しをもつ。
- ・埋土はほぼ単層で、構成物もほとんど同一である。一部に人為的に埋め戻された形跡も見られる。
- ・遺構検出面が基本層序Ⅲ層上面であり、ほとんど同位面である。
- ・出土遺物が極端に少ない。
- ・炉やカマドが検出されない。
- ・どの住居跡の埋土からも鉄滓が出土している。
- ・重複関係がない。

これらの共通点から7棟は同時存在か時期的に大差なく存在していたと推測できる。

また、中世の竪穴住居跡と比定した模倣として、次の点があげられる。

- ・15～16世紀の舶載および国産陶磁器、鍾銭、鉄製品が出土した。
- ・二戸市付近で検出される古代の竪穴住居跡の埋土には十和田A火山灰を含む場合が多いが、本住居跡では含まない。
- ・古代の住居跡では、遺物として土師器や須恵器を伴うことが多いが、本住居跡ではそれらを伴わない。
- ・古代の住居跡では「カマド」をもつものが一般的であるが、本住居跡ではみられない。
- ・古代の住居跡では張り出しをもたないが、中世の住居跡では張り出しをもつ例が多い。

このような点から古代の住居跡とは考えられず、中世の住居跡と推定される。

本遺跡で検出された住居跡と同じ特徴をもつ住居跡は他の遺跡でも検出されている。県内では二戸市内の長瀬C遺跡・長瀬D遺跡・沖I遺跡、一戸城跡、一戸町鳥越館跡、浄法寺町五座Ⅱ遺跡、安代町開口沢遺跡、曲田I遺跡、上の山遺跡、九戸村江刺家遺跡、軽米町駒板遺跡、盛岡市繁三遺跡、里館遺跡、金ヶ崎町館山遺跡、雫石町下平遺跡、紫波町中田遺跡、花巻市笹間館跡、古館Ⅱ遺跡、北上市丸子館跡、水沢市玉貫遺跡などである。青森県では浪岡町浪岡城跡、八戸市根城跡、青森市尻八館、秋田県では大館市館口遺跡、比内町谷地中「館」遺跡、柴平村七館遺跡などで検出されている。他の県での検出例も見られるが圧倒的に東北部での検出が多く、岩手県では二戸市で集中して検出されている。そこで本遺跡の7棟に二戸市でこれまでに検出された中世の竪穴遺構22棟を加え考察することにする。

1. 平面形と規模

平面形は方形ないし長方形を基調とし、出入口の張り出しを有するものは18棟である。

規模は3群に大別される。

I群 長軸の長さが2.8m～3.5m未満で、平均規模は3.3m×2.9mを測る。9棟が該当。

II群 長軸の長さが3.9m～4.5m未満で、平均規模は4.0m×3.6mを測る。11棟が該当。

III群 長軸の長さが4.5m以上で、平均規模は5.0m×4.2mを測る。7棟が該当。

平面形と規模との関係を見るとI群には張り出しをもたない遺構が多く、II群には張り出しをもつものの割合が高い。長軸の長さが5mを超えるものは、すべて張り出しをもつ。

本遺跡から検出された住居跡は、張り出しをもたない2号・3号住居跡と張り出しをもつ4号住居跡がI群に属し、残りの張り出しをもつ1号・5号・6号・7号はII群に属している。床面の規模からいえば、古代の住居跡に比べ小型のものが多く、壁高は10～50cm前後で、本遺跡の住居跡は25cm程のものが多く、張り出しをもたない住居跡は20cm前後と浅い。

2. 張り出し

張り出しの方向は東から南にかけてが圧倒的に多く、18棟中13棟を数える。また、同一遺跡から検出された住居跡はほぼ同一方向に張り出しをもつ傾向がある。長瀬C遺跡の住居跡はS-41°～64°-Eの範囲に張り出しをもち、本遺跡の住居跡はS-64°～73°-Eの範囲に4棟が集中する。平面形は方形及びU字状を呈し、床面からなだらかなスロープとなって検出面まで上がっている。

3. 柱穴

検出された柱穴数は、少ない住居跡で6基、多い住居跡で38基を数える。柱穴はほとんどが四隅と壁際に据えられ、約半数は床面でも柱穴が検出されている。本遺跡の住居跡は5棟が床面に柱穴をもつが、長瀬C遺跡の住居跡は床面に柱穴をもつものが1棟のみである。また、張り出し部には2～6基の柱穴が設けられている。深さはバラツキが大きいのが50cm以上のものが多い。柱痕の径は確認できたもので15～20cmを測る。

4. 炉

カマドはいずれの住居跡からも検出されておらず、長瀬C遺跡（2次調査）の1棟、沖I遺跡の3棟、沢内B遺跡の2棟から地焼炉が検出されている。また、下村B遺跡の2棟からは焼土が検出されている。本遺跡では1号住居跡の床面から灰が検出されただけで炉は検出されていない。

5. 遺物

遺物は全く出土しないか、出土しても極少量である。種類としては銭貨（私鑄銭が多い）陶磁器・刀子・角釘などで、縄文土器・土師器などは埋土からの出土である。

本遺跡の竪穴住居跡からは、舶載と国産の陶磁器、銭貨、鉄製品、鉄滓が出土している。鉄滓が出土していることから、付近に鍛冶遺構が存在するものと思われる。

6. 占地

住居跡はすべて調査区中央部東側に集中し、柱穴状土坑群を取り巻くように立地している。柱穴状土坑群から確認できた掘立柱建物跡は1棟だけであるが、土坑の数から他にも存在していたものと思われ、掘立柱建物群を囲むように竪穴住居が構築されていた可能性もある。

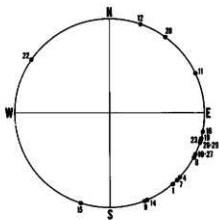
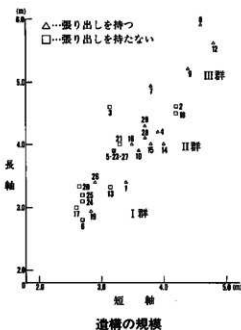
中世の竪穴遺構については、これまでの研究から住居、作業小屋、簡易宿泊施設、兵舎、工房、家畜小屋、穀物倉庫など様々な機能が考えられている。また、呼称についても竪穴住居跡、竪穴状遺構、竪穴遺構、竪穴建物跡などが使用されている。八ツ長Ⅱ遺跡の遺構については生活に供する遺物が出土しているものの点数が少なく、炉跡が検出されないなど不確定な要素もあるが、二戸市内の同様の遺構で多く用いられている「竪穴住居跡」を使用した。

八ツ長Ⅱ遺跡の0.5km西方にある中世城館の四戸城跡、国道395号を挟んで隣接し中世竪穴住居跡が検出されている沖Ⅰ遺跡との関連については、今後の研究の成果を待ちたい。

表5 二戸市内の中世竪穴遺構

No.	遺跡名	住居跡名	規模(m)	壁	高	掘り直し方向	柱穴数	柱穴の配置	夕・礎石・基礎等	遺物
1	長瀬C	24D住居跡	3.4×3.4	0.45	S-41°-E	18(4)	西側・壁跡			炭石・銭貨・土師器片
2	長瀬C	48E住居跡	4.6×4.2	0.20	-	8	西側・壁跡			銭貨
3	長瀬C	49G-1住居跡	4.6×3.14	0.30	-	10	西側・壁跡			銭貨・土師器片
4	長瀬C	49G-2住居跡	4.2×3.92	0.30	S-47°-E	18(4)	西側・壁跡			銭貨・漆針状銅製品
5	長瀬C	49G-3住居跡	3.9×3.2	0.32	-	13	西側・壁跡			
6	長瀬C	49H住居跡	2.8×2.7	0.19	-	6	西側			銭貨
7	長瀬C	51G住居跡	4.94×3.8	0.50	S-45°-E	16(2)	西側・壁跡			銭貨・内釘・磁器・土師器片
8	長瀬C	53G住居跡	5.9×4.6	0.50	S-62°-E	38(2)	西側・壁跡・床面			銭貨・刀子・石製品・陶磁器
9	上里D	14住居跡	5.2×4.4	-	S-21°-E	22(2)	西側・壁跡・床面			
10	長瀬C	A-4住居跡	3.9×3.6	0.13~0.18	S-61°-E	15(4)	西側・壁跡	地床中		陶器片・土師器片・縄文土器
11	馬場	C1-31住居跡	-×4.0	0.08~0.18	N-65°-E	24(3)	西側・壁跡・床面			鞍石・炭石・土師器片
12	沖I	3501住居跡	5.6×4.8	0.30~0.40	N-19°-E	27(4)	西側・壁跡・床面	地床中		
13	沖I	C101住居跡	3.32×3.14	0.30~0.40	-	11	西側・壁跡	地床中		
14	沖I	C101住居跡	4.0×4.0	0.20~0.30	S-22°-E	14(2)	西側・壁跡・床面			
15	沖I	C102住居跡	4.0×3.8	0.20	S-18°-W	10	西側・壁跡・床面	地床中		
16	沢内B	C-2住居跡	4.0×3.5	0.45	S-79°-E	16(4)	西側・壁跡・床面	地床中・壁跡		縄文土器片
17	沢内B	B-2住居跡	3.0×2.6	0.20~0.45	-	16	西側・壁跡・床面	地床中		縄文土器片
18	駒込場	3号遺	4.5×4.2	-	-	-	不明	西側・壁跡・床面		
19	下村B	Bb09竪穴遺構	2.85~2.88×2.80~2.86	0.19~0.16	S-74°-E	27(2)	西側・壁跡	礎石・基礎		
20	下村B	Cc12竪穴遺構	3.25~3.42×2.54~2.75	0.12	-	24(7)	西側・壁跡	礎石・基礎・隅溝		銭貨
21	家の上	Bd53住居跡	4.0±3.3±	0.05~0.16	-	12+*	西側・壁跡・床面			銭貨・縄文土器片
22	長瀬D	E40住居跡	4.0+*×3.7	0.50	N-56°-W	24(3)	西側・壁跡・床面			
23	八ツ長Ⅰ	1号住居跡	3.9×3.2	0.26~0.53	S-72°-E	21(4)	西側・壁跡	灰		磁器・漆製品・石臼・陶器片
24	八ツ長Ⅰ	2号住居跡	3.1×3.7	0.19~0.21	-	13	西側・壁跡・床面			磁石・鉄滓
25	八ツ長Ⅰ	3号住居跡	3.2×2.7	0.14~0.23	-	15	西側・壁跡・床面			陶器片・内釘・銭貨・鉄滓
26	八ツ長Ⅰ	4号住居跡	3.4×2.9	0.13~0.28	S-72°-E	20(5)	西側・壁跡・床面			内釘・漆製品・白磁片・鉄滓
27	八ツ長Ⅰ	5号住居跡	3.9×3.3	0.28~0.45	S-64°-E	14(3)	西側・壁跡			内釘・漆製品・白磁片・鉄滓
28	八ツ長Ⅰ	6号住居跡	4.1×3.7	0.11~0.20	N-36°-E	19(3)	西側・壁跡・床面			内釘・鉄滓
29	八ツ長Ⅰ	7号住居跡	4.3×3.7	0.15~0.29	S-72°-E	12(7)	西側・壁跡・床面			炭付・鉄滓

※ 柱穴数の欄の数字は総数。()内は掘り直し部分の柱穴数
 ※ 11・22は遺構の一部が調査区外に属する。



張り出しの方向

〈引用・参考文献〉

- 青森県立郷土館 (1981): 『尻八館調査報告書』
- 秋田県教育委員会 (1990): 『竜毛沢館発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第188集
- 秋田県教育委員会 (1987): 『高瀬館跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第153集
- 一戸町教育委員会 (1989): 『鳥越館跡』一戸町文化財調査報告書第21集
- 岩手県 (1971): 『土地分類基本調査「一戸」』
- 岩手県埋蔵文化財センター (1978): 『沢内B遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第7集
- 岩手県埋蔵文化財センター (1981): 『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 長瀬C・長瀬D遺跡』岩埋報告書第22集
- 岩手県埋蔵文化財センター (1982): 『家ノ上・長瀬A遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第35集
- 岩手県埋蔵文化財センター (1983): 『長瀬C遺跡第2次発掘調査報告書』岩埋文報告書 第51集
- 岩手県埋蔵文化財センター (1983): 『上里遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第55集
- 岩手県埋蔵文化財センター (1983): 『上村・下村A・下村B遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第56集
- 岩手県埋蔵文化財センター (1983): 『釜山遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第65集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1989): 『駒境場遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第133集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1990): 『馬場遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第137集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1990): 『馬場Ⅱ・沖Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第152集
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力 (1966): 『馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰』第四紀研究第5巻
- 鹿角市教育委員会 (1989): 『当麻館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料37
- 工藤清春 (1988): 『浪岡城跡の発掘調査成果から見た北日本における中世城跡研究の課題』よねしろ考古第4号
- 高橋信雄 (1989): 『戦国期の工人集落—堅穴状建物群—』よみがえる中世4 平凡社
- 浪岡町教育委員会 (1985): 『浪岡城跡Ⅱ』昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 二戸市教育委員会 (1978): 『駒境場遺跡緊急発掘調査報告書』

表6 鉄製品一覽表

区別遺物番号	出土地点	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	写真図版番号
8-2	1号住	埋土下位	櫛鏡片?	5.3	1.5	0.5	7.8	鑑定	14-2
11-21	3号住	埋土下位	角釘	3.2	0.9	0.7	1.7		15-21
11-22	3号住	埋土下位	角釘	3.2	1.1	0.9	4.0		15-22
11-23	3号住	埋土下位	刀子	3.6	1.2	0.3	2.9		15-23
14-25	4号住	埋土下位	不明	4.8	1.2	0.7	13.5		15-25
14-26	4号住	埋土下位	角釘?	4.1	0.4	0.3	2.2		15-26
14-34	5号住	埋土下位	角釘	3.4	1.4	0.7	4.7	鑑定	15-34
14-35	5号住	埋土下位	角釘	3.0	1.1	0.9	4.6		15-35
14-36	5号住	埋土下位	不明	2.6	2.8	0.7	30.7		15-36
14-37	5号住	埋土下位	角釘	8.0	0.7	0.6	7.0		15-37
17-51	6号住	埋土下位	角釘?	5.3	0.8	0.6	5.7		16-51
32-70	柱穴№149	埋土下位	不明	5.9	1.8	0.4	30.6	鑑定	16-70
32-71	柱穴№107	埋土下位	不明	4.5	1.3	0.9	9.1		16-71
32-72	柱穴№027	埋土下位	角釘?	3.1	1.2	0.6	4.6	鑑定	16-72
32-73	柱穴№098	埋土下位	角釘	2.8	1.2	0.6	2.7		16-73
32-74	柱穴№179	埋土下位	角釘	5.2	0.7	0.4	3.6	鑑定	16-74
32-75	柱穴№148	埋土下位	不明	3.5	3.6	0.5	12.7		16-75
32-76	柱穴№081	埋土下位	小札	2.8	2.3	0.1	3.0	鑑定	16-76
32-77	柱穴№230	埋土下位	不明	3.5	1.2	0.7	7.5		16-77
32-78	柱穴№107	埋土下位	不明	2.0	2.0	0.4	4.5		16-78
32-79	柱穴№148	埋土下位	刀子	2.2	1.4	0.4	3.6		16-79
34-95	遺構外	Ⅱ層下位	角釘	3.5	0.8	0.5	6.1		17-95
34-96	遺構外	Ⅱ層下位	角釘	4.4	0.6	0.4	2.9		17-96
34-97	遺構外	Ⅱ層下位	角釘	4.9	0.6	0.4	2.7		17-97
34-98	遺構外	Ⅱ層下位	角釘	5.7	1.0	0.5	5.9		17-98
34-99	遺構外	Ⅱ層下位	角釘	6.8	0.6	0.5	6.4		17-99
34-100	遺構外	Ⅱ層上面	角釘	7.5	0.7	0.4	5.5		17-100
34-101	遺構外	Ⅱ層下位	角釘	8.1	1.0	0.5	6.2		17-101
34-102	遺構外	Ⅱ層下位	不明	5.3	1.8	1.2	15.2		17-102
34-103	遺構外	Ⅱ層下位	不明	3.3	2.2	0.8	12.9		17-103
34-104	遺構外	Ⅱ層下位	刀子	5.2	1.3	0.2	5.3		17-104
34-105	遺構外	Ⅱ層下位	不明	4.5	2.1	0.4	10.4		17-105
34-106	遺構外	Ⅱ層下位	不明	4.8	1.3	0.7	8.6		17-106
34-107	遺構外	Ⅱ層下位	不明	4.1	2.4	0.7	26.6		17-107
34-108	遺構外	Ⅱ層下位	不明	4.0	1.9	0.4	6.7		17-108
34-109	遺構外	Ⅱ層上面	小札	7.3	3.1	0.4	16.2	鑑定	17-109
34-110	遺構外	Ⅱ層下位	不明	6.2	4.5	0.7	25.4		17-110
34-111	遺構外	Ⅱ層上面	不明	4.9	3.5	0.5	28.9		17-111
34-112	遺構外	Ⅱ層上面	不明	11.3	1.4	0.4	11.3	鑑定	17-112

表7 石器一覽表

区別遺物番号	出土地点	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考	写真図版番号
8-11	1号住	埋土下位	磨石	4.4	6.6	5.2	189.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	14-11
9-12	1号住	埋土下位	磨石	15.6	18.2	8.0	3870.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	14-12
9-13	1号住	埋土下位	磨石	15.3	9.9	11.1	2030.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	14-13
9-14	1号住	埋土下位	磨石	10.7	5.3	4.7	383.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	14-14
9-15	1号住	埋土下位	磨石	23.1	7.1	5.3	1672.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	14-15
9-16	1号住	埋土下位	石臼	12.0	8.0	7.6	1036.0	安山岩滑岩	岩手八幡平・第四系	14-16
10-17	2号住	埋土下位	磨石	20.4	10.9	5.1	1693.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	14-17
11-20	3号住	埋土下位	不定形石器	4.0	1.5	0.8	4.3	チャート質粘板岩	北上山地・古生界	15-20
14-31	4号住	埋土下位	磨石	5.0	8.2	2.4	145.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	15-31
15-50	5号住	埋土下位	磨石	9.6	9.2	4.8	693.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	15-50
23-61	3号土坑	底面	磨石	6.9	6.1	4.8	252.0	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	16-61
33-85	遺構外	Ⅱ層	石鏝	3.4	1.5	0.3	1.3	チャート	北上山地・古生界	17-85
33-86	遺構外	Ⅱ層	磨石	4.8	2.8	2.1	39.1	輝石安山岩	馬淵川流域・新第三系	17-86
33-87	遺構外	Ⅱ層	磨石	7.4	2.4	1.2	32.0	輝石安山岩	二戸市野迫・新第三系	17-87

ハツ長Ⅱ遺跡 植物珪酸体分析報告

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

分析試料は、送付された時点での観察結果を含め、表1にまとめた。

表1 ハツ長Ⅱ遺跡より出土した灰の肉眼観察結果

No.	遺跡名	遺構名	時代	観察結果
1	ハツ長Ⅱ 遺跡	1号住居跡 床面直上	中世	灰色シルト中に灰状あるいは微小な植物遺体が混入する。

2. 分析方法

湿重5g前後の試料を過酸化水素水 (H_2O_2) で泥化し、塩酸 (HCl) を加えて有機物・鉄分を除去した。この段階で検鏡したところ、イネ科植物葉部の組織片が多く認められた。そのため、この段階で給源植物に関する検討が可能であると判断できたため、試料をブリュワラックスで封入してプレパラートを作成した。400倍の光学顕微鏡 (簡易偏光装置装備) 下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) の組織片を近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数した。

また、植物遺体試料はルツボに取り、水洗して乾燥し、電気炉内で600°C・30分を目安に燃焼させ灰化した。灰化試料をプレパラートに封入し、顕微鏡下で観察した。

3. 植物珪酸体の酸状と所見

試料には栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体やキビ族 (キビ属・エノコログサ属など) およびウシクサ族 (ススキ属など) の短細胞珪酸体列と機動細胞珪酸体列が検出される (表2)。したがって、ハツ長Ⅱ遺跡の1号住居跡床面直上から検出された灰の給源植物は、イネ属・キビ族・ウシクサ族であった可能性が高い。

ところで、植物珪酸体から燃焼材を推定した例として東京都多摩ニュータウン遺跡の焼土の調査 (佐瀬, 1982) や千葉県印旛村平賀遺跡群から検出された炉址焼土を対象とした調査 (大越, 1985) がある。多摩ニュータウン遺跡の焼土調査では、古墳時代にススキなどのキビ亜科

植物が炉用として選択的に利用されたことが推定された。また、平賀遺跡群の調査では炉址内の焼土からイネ科植物葉部の組織片が多く検出され、縄文時代早期から奈良時代までは燃えつきやすく火力の強いタケ亞科が、古墳時代から奈良時代にはススキ属やイネ属が多く使用された可能性が指摘されている。

燃焼材に関する検討は今後さらに資料を蓄積する必要があるが、これらと八ツ長Ⅱ遺跡試料を比較する限り、同様な種類が認められることから今回検出した種類が燃焼材として利用された可能性が考えられる。

引用文献

近藤殿雄・佐瀬隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 第25号, p. 31-64

大越昌子 (1985) ブラント・オパール分析, 平賀遺跡群発掘調査報告書, 平賀遺跡調査会, p 803-815

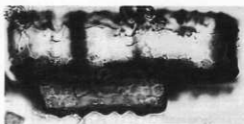
佐瀬隆 (1982) 古墳時代住居址の炉に関する焼土について, 一植物起源粒子の植物珪酸体から見て一, 多摩ニュータウン遺跡, 東京都埋蔵文化財センター調査報告書 (第2集), p 303-308

表2 八ツ長Ⅱ遺跡より出土した灰の組織片計数結果

種類 (Taxa)	遺構名	1号住居跡
	出土部位	床面
組織片		
イネ属葉部短細胞列		78
イネ属葉身機動細胞列		2
キビ族キビ属葉部短細胞列		3
キビ族エノコログサ属葉部短細胞列		3
キビ族葉部短細胞列		19
キビ族葉身機動細胞列		3
ウシクサ族ススキ属葉部短細胞列		2
ウシクサ族葉身機動細胞列		1
キビ型珪酸体列		2
ダンチク型珪酸体列		1
合計		114



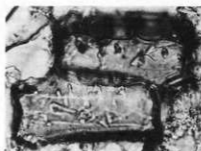
1. イネ属葉部短細胞列



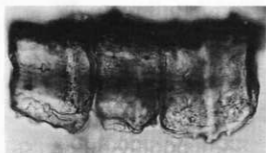
2. イネ属葉身機動細胞列



3. エノコログサ属葉部短細胞列



4. キビ族葉身機動細胞列

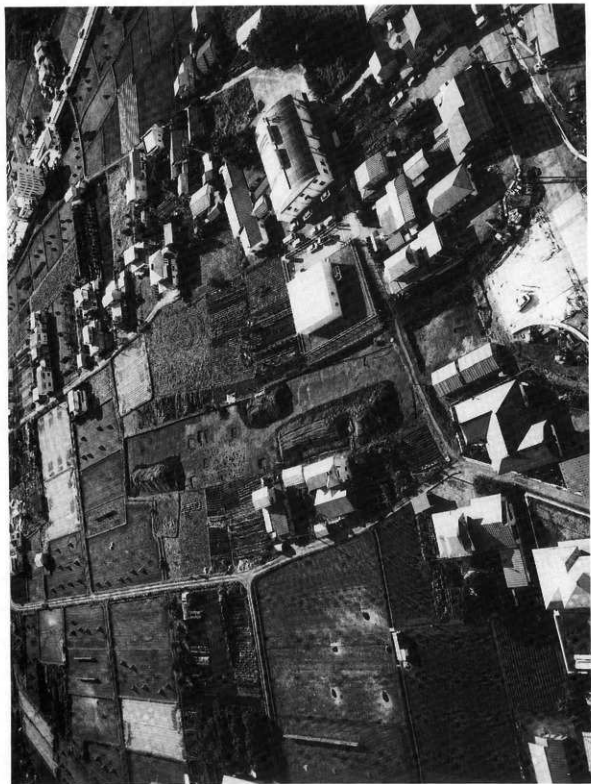


5. ウシクサ族葉身機動細胞列

25 μm

図版 I 植物珪酸体、珪化組織片の顕微鏡写真

写 真 图 版



写真図版1 遺跡全景(空中写真-北東から)

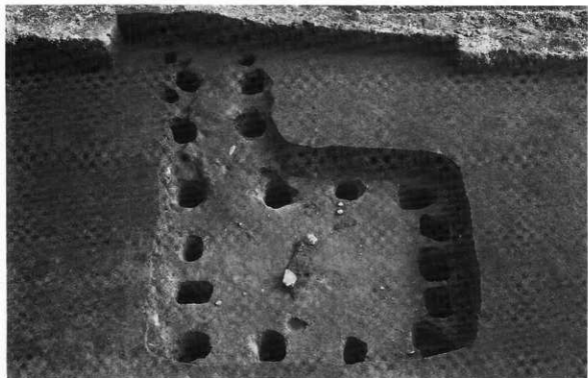


調査前近景（南から）



南壁土層断面

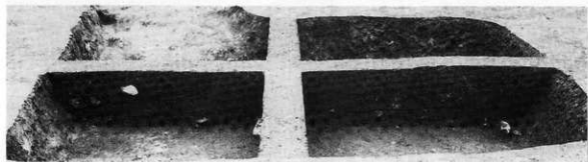
写真図版 2



平面 (西から)

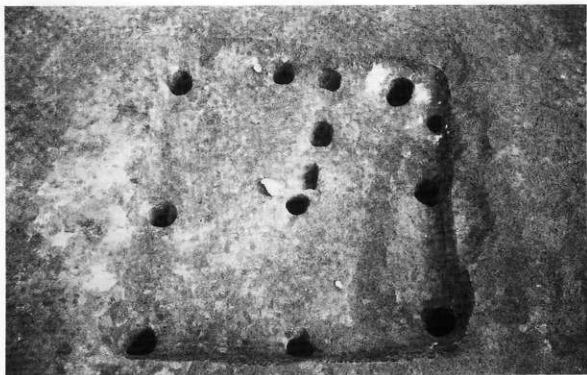


埋土断面 (東西)

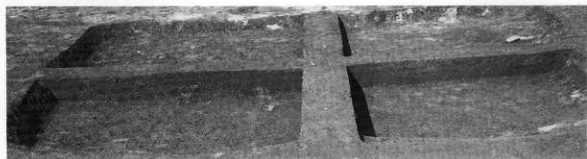


埋土断面 (南北)

写真図版3 1号住居跡



平 面 (西から)

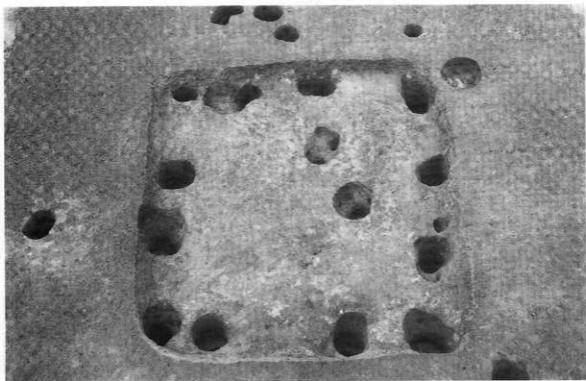


埋土断面 (東西)

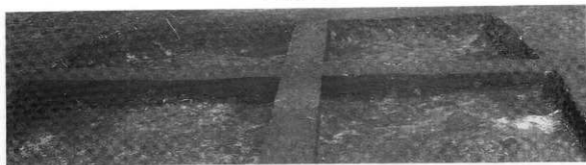


埋土断面 (南北)

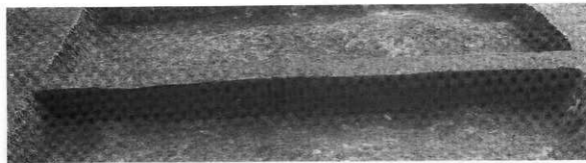
写真図版 4 2号住居跡



平面（西から）

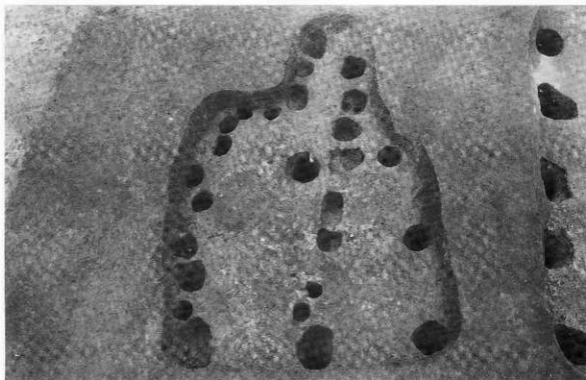


埋土断面（東西）



埋土断面（南北）

写真図版5 3号住居跡



平面（西から）

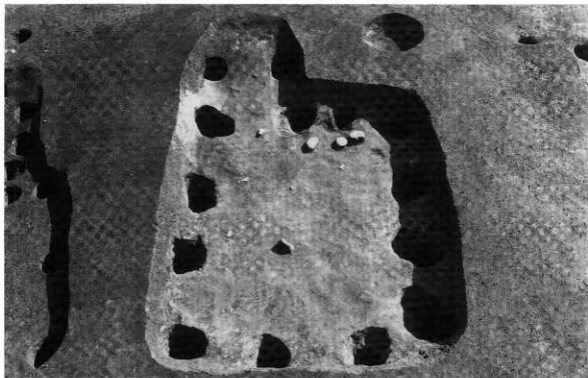


埋土断面（東西）



埋土断面（南北）

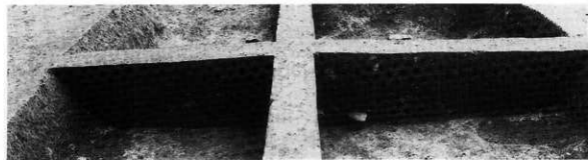
写真図版6 4号住居跡



平面（西から）

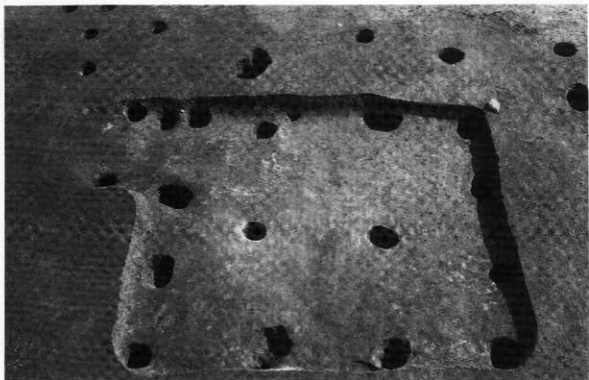


埋土断面（東西）

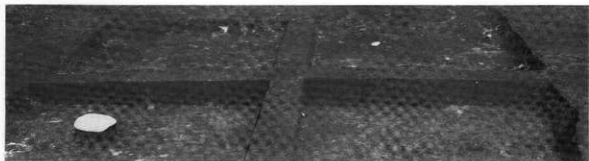


埋土断面（南北）

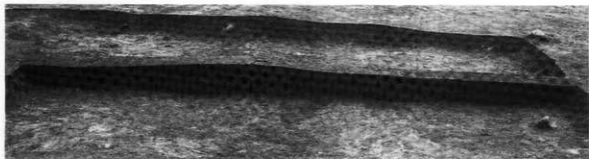
写真図版7 5号住居跡



平面 (西から)

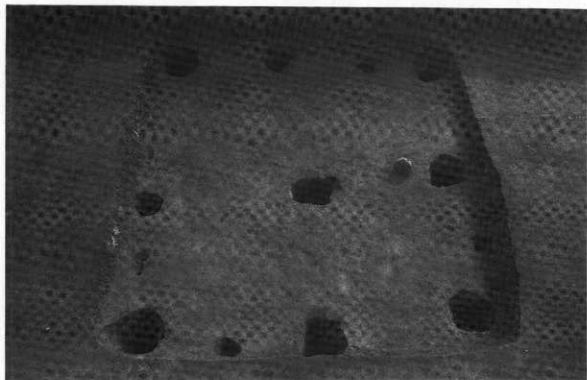


埋土断面 (東西)

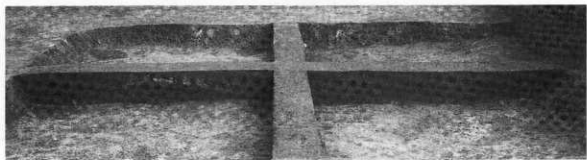


埋土断面 (南北)

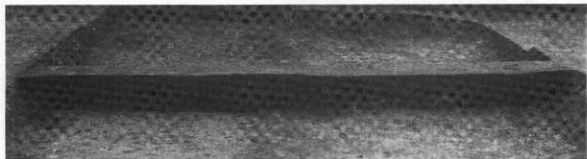
写真図版8 6号住居跡



平面（西から）



埋土断面（東西）

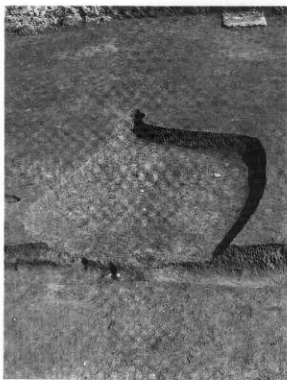


埋土断面（南北）

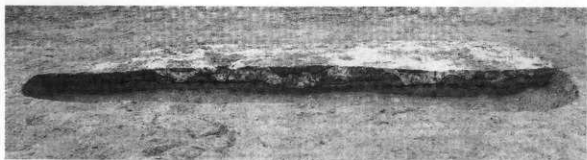
写真図版9 7号住居跡



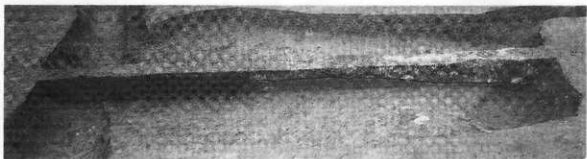
1号土坑平面



2号土坑平面

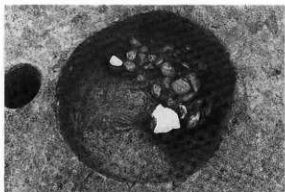


1号土坑断面



2号土坑断面

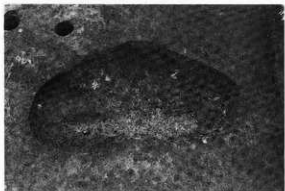
写真图版10 土坑 (1)



3号土坑平面



3号土坑断面



4号土坑平面



4号土坑断面

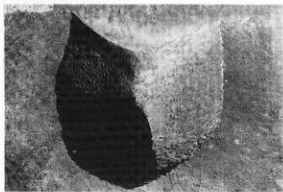


5号土坑平面



5号土坑断面

写真图版11 土坑 (2)



6号土坑平面



6号土坑断面



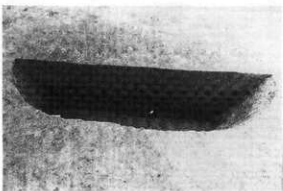
7号土坑平面



7号土坑断面

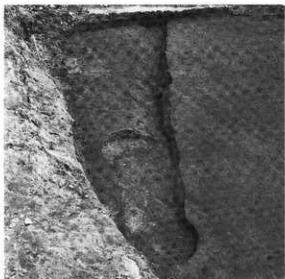


8号土坑平面



8号土坑断面

写真图版12 土坑 (3)



1号沟平面



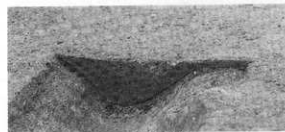
2号沟·3号沟平面



1号沟断面(1)



1号沟断面(2)



3号沟断面

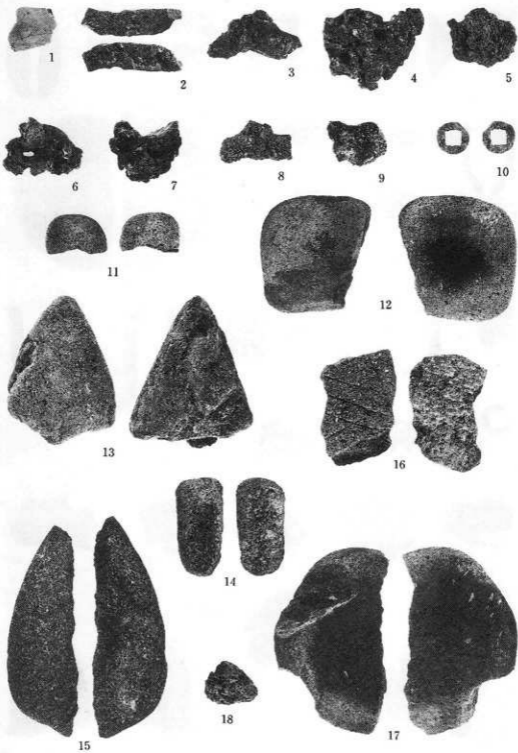


2号沟断面(1)

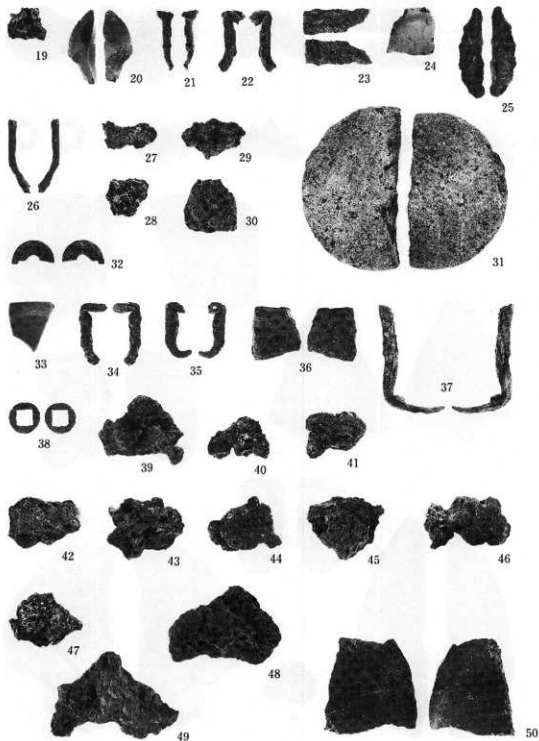


2号沟断面(2)

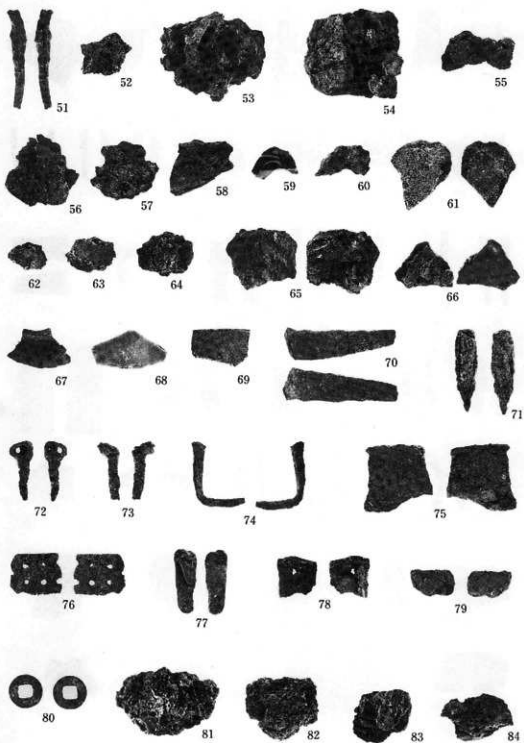
写真図版13 溝 跡



写真図版14 遺物(1)



写真図版15 遺物(2)



写真図版16 遺物(3)



写真图版17 遺構外出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 長	小笠原 喜 一				
副 所 長	高 橋 敬 明				
[管理課]					
管理課長(兼)	高 橋 敬 明				
管理課長補佐	森 岡 陽 一				
主 事	佐 藤 理				
[調査課]					
調査課長	村 上 康 昭				
課長補佐 (第一班)	佐々木 嘉 直				
課長補佐 (第二班)	鈴 木 恵 治				
主任文化財 専門調査員	小田野 哲 憲				
◇	三 浦 謙 一				
◇	工 藤 利 幸				
◇	高 橋 與右衛門				
◇	平 井 進 紀				
◇	中 川 重 敏				
◇	藤 村 敏 男				
◇	高 橋 義 介				
文 化 財 専門調査員	斎 藤 實 隆				
◇	千 斎 孝 雄				
◇	千 斎 博 司				
◇	東 海 林 隆 幹				
◇	佐々木 弘 均				
◇	川 村 貞 行				
◇	鈴 木 東 格				
◇	伊 遠 藤 修				
◇	斎 藤 邦 雄				
◇	神 敏 明				
[資料課]					
資料課長 主任文化財 専門調査員	村 松 義 夫 田 領 寿 夫				
		嘱 託	吉 田 一 男		
		◇	橋 文 春		
		運 転 技 士 員	佐々木 信 一		
		兼 技 能 員	小 原 眞 一		
			村 上 修		
			酒 井 宗 孝		
			松 本 達 速		
			笹 平 克 子		
			花 坂 政 博		
			佐々木 務 彦		
			金 子 昭 彦		
			演 田 精 宏		
		期 限 付 員	録 田 精 則		
			阿 部 邦 彦		
			安 星 雅 之		
			引 屋 敷 学		
			鈴 木 知 己		
			藤 村 隆 悟		
			熊 谷 博 由		
			新 倉 信 一		
			山 口 博 英		
			川 村 聡 子		
			八重 座 のり		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第168集

八ツ長Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号線金田一バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成4年3月25日

発行 平成4年3月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
TEL (0196) 38-9001

印刷 榊吉田印刷
〒020 岩手県盛岡市名須川町23番27号
TEL (0196) 25-2323